



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	ニーチェとオーヴェルベックとの往復書簡（三）：1884年から1886年まで
Author(s)	古内, 武
Citation	北海道大学人文科学論集, 11, 59-123
Issue Date	1974-01-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/34311
Type	departmental bulletin paper
File Information	11_PR59-123.pdf



ニーチェとオーヴェルベック

との往復書簡(三)

——一八八四年から一八八六年まで——

古内 武

一九六、ニーチェより

〔一八八四年一月二六日受領〕

ニース(フランス)ジュネーヴ館、聖エティエンヌ小路。

古い友よ、こんな紙片で済まない——しかし書こうと思っているのは一つの良い報せだ。去る金曜以来「ツァラトウストラ如是説」が完全に出来上がっている——そして今は清書の最中だ。従って全体が丁度一年の間に出来たわけだ。しかも厳密には三 × 二週の間だ。——今度の二週は僕の生涯で最も幸福な時期だった、僕はこの様に帆を孕んでこの様な海を走ったことは一度もない。一八七〇年に君が僕を知って以来ずっと続いているこの航海者物語全体の途方もない大陽気はその頂点に達した。

遠ざかって行く年における僕の状態がどの様であったかは、僕のこの前の手紙が暗示を与えた。また僕はニースの地に全く不案内なためにたつぷりと罰せられた。少なからぬ金の損失さえもあった。僕が部屋代と食費を前払いしてあった女家主が行方をくらましてしまったので。

今や僕はスイス人宿という信用のおける静かな世界へ引っ込んだ。

僕のツァラトウストラの完成は僕の健康に非常に良い影響を及ぼした。——古い親友よ、僕が気晴らしのためにノ計画している次の作はあらゆる種類の現今のドイツ蒙昧主義に対する大きな正面攻撃だ(「新しい蒙昧主義者たち」という表題で)。これには——君の助言と君の援助が必要だ!

心から君の

N

一九七、ニーチェより

〔ニースから。一八八四年二月八日バーゼルで受領〕

わが古い親友よ、「内臓」とそれに関連した事柄について報され悲しく思う。罪のためであるかの如くに冬のために罰せられねばならないという意識を北国で持たされる月は、悪い月だ。噫、今や北国で「罰せ」られずに済むものがあるうかノ環境、さまざまな努力、孤独化——結局そこでは一切が冬なのであり、遂には「内臓」に影響する。——それだけに僕を動かすのは「内心の歓声」という君の言葉だ。噫、友よ、僕が「僕の峠を越え」たのを誰が一体他に喜んでいるだろうノヴェネツィアの隠者と、さらにヴァロンブローサの隠者だ(後者も悲しいかな内臓の悩みが多いノ)。

——ドイツの状態について言えば、君の言葉から読み取れる僕への君の助言は恐らく正しいと思う、つまり「泥を掻き起こすべからず」だ。何という醜い、そして根本において一時的なあれこれの事柄に通曉せねばならなくなることかノそんなに多くのことを知ってもいないし、また知る必要もないというのが、結局のところ僕の立場のレッ

テルなのだ（例えば「ノルダウ」という名を僕は知らない）。全くだ、僕たちは待つとしよう、そして僕たちの敵愾心を大きく育てよう。

ところで何か「気晴らし」が僕には必要だ、そしてそれは戦闘的なものでないとすれば、激しい筋肉運動であらねばならない——徒歩行進など。

僕は何時かりヴィエーラ海岸をサン・ラファエルまで歩き通すかも知れない。今までのところ僕はニースの氣候を、全く僕に適していると見なしている。ジェーノヴァは大きな失策だった、そしてサント・マルゲリータは——生命に関わるものだった。——他面においてニースは僕の氣に入らない。パリの模倣であり、威張っている半端——大都市だからだ。森、蔭、静けさが信じられぬほどに欠けている。僕が富んでいれば、リヴィエーラ海岸の何処か別の場所に住むのだが。しかし比較的にはここで暮らすのが勿論一番安いのだ、ここが最大の都会なのだから。

親友よ、止むを得ない、僕たちはこの前の五〇〇フランを職工銀行からおろさねばならない。僕は今、金が必要だ。しかし僕は今年は何事にも腹を立てない積りだ。腹を立てる理由は色々あるのだが。

既に印刷は行なわれている、もしシュマイツナーが責めを果たしたとすればだ。——ところでツアラトウストラ全体は、何十年もの間に蓄積されてきたもろもろの力の爆発なのだ。この様な爆発の場合には著者自身も一緒に空中へ簡単にはねとばされ兼ねないのだ。僕はそんな氣がすることがしばしばだ、——このことを僕は君に隠したくない。さらに僕には前以て分かっていることを言おう。もし

君がこの終楽章から、何が一体このシンフォニー全体によって言われているのか（——非常に芸術的に、そして例えば塔を建てる時の様に少しずつだけれど）を見て取るならば、——僕の古い誠実な友よ、君でさえ或るどう仕様もない驚愕と戦慄を押さえ得ないだろう。君は非常に危険な友人を持っているのだ、そしてその友人における最も困った点は彼が非常に多くのものを抑制出来るという点だ。僕は何と欲していることか、君と君の奥さんと一緒に笑うことを（僕自身を死ぬほど笑うことを!!!）。

心から君の

ニーチェ

① カンヌとサン・トロペの中間にある都市。ニースから約六〇軒。

一九八、ニーチェより

（ニース、八四年二月一四日受領）

わが親友よ、心配御無用！何とか行っているし、行く筈だ！本當を言くと、或る変化が僕に生じている、そしてその際に、僕が次の瞬間をどうやって堪えればいいのか分からない瞬間が往々あることは勿論だ。しかし僕はポケットが全部一杯になるほどの経験と自分で考えた処方方を持っている。今までに一人の人間が自身をこんなにも独りぼっちと感じたことが一体あったろうか？僕は遂には啞になるのではなからうか？少なくとも僕は毎日何回かはナポレオンに賛成したくなる、彼はこう言ったのだ、「書かない事柄はあるものだ」と。

健康はその後益々良くなった、新年になってから僅か三回の発作だ。僕の果たした仕事と同時に僕の身体を元気づけてくれる救いの力となっているのだと思う。この十年間の緊張は大き過ぎた、このことが幾多の肉体的結果を生んだ。——噫、自分の使命を立派に貫き通しさえすればいいのだ、それが一番良い航海なのだ。ところで僕は初めて自分の主要思想に一つの形式を与えた——そしてだね、恐らく僕は同時に自分自身に初めて「一つの形式を与えた」のだ。——

序でながら僕は、親愛なる同時代者たちとの僕の交際を式部官の如くに少々見張っていてくれる人間を次第に必要としている、僕がせめて今後は人間的愚鈍 *betise humaine* のひどい乱暴や不正に曝されないためにだ。最近数年間に、最近の日日に至るまで僕に敢て加えられてきた不遜な厚かましい仕打ちには——一切の想像及び忍耐を越えている。僕は自分を今後は全く違った風に僕の孤独の中にくるみ込まねばならない。しかし特に僕が止めねばならないのは、自分が悩んでいることを示す手紙を書くことだ。悩んでいる者は、容易に誰でも餌食になる。悩んでいる者については誰でもが賢者だ。——（全く客観的に見て、悩んでいる者は何と多くの楽しみを、まさしく悩んでいない人々に与えることか！）——

ヴァロンブローサとは多くの文通、写真の交換、氣象学的表を送って貰ったり、等々。問題はまだ解決されていない。

送金に心から感謝！これが着いた時は笑った、何故なら僕は確かにもう少し待つことが出来た筈だったから！けれど僕の一般的「不安」は時折りこの様な全く特殊な不安の中に現われるのだ、例えば

僕はまだ明後日のために十分な金を、或いはマッチ等々を持っていようかという様な。

ところで僕はまだ、僕の徒歩旅行に同伴しようとする者を見つけていない。ひとりの旅行——は近視の僕には結局、動物虐待の様なものだ。それで僕はもう少しここに留まるだろう、光が今ではもう僕には強過ぎる様になっているのだけれど。

こんなに貧乏でなければいいのだが！せめて奴隷を一人持ちたいものだ、一番貧乏なギリシャの哲学者だって持っていたのだから。僕は実に多くの事柄に対して盲目であり過ぎる。

君と奥さんに心の底から愛着しつつ

N

一九九、ニーチェ

（ニース、八四年三月一〇日受領）

わが親友オーヴェルベックよ、同封するのは非常に良い報せの載っている手紙だ。何と長いこと僕はヴェネツィアの僕たちの音楽家のこの決心を待ったことか！——しかもこれは、ひとに沈黙を課する類の事柄だった。さて——彼は彼の「隊」の先頭に立とうとしているのだ、指揮棒を手にしてだ！僕は彼に書いた、もはや一日も猶予せずに興行者との契約を堅く結ぶ様にと。

彼の手紙の冒頭には僕のツアラトゥストラのことが書かれているが、君を満足させるよりもむしろ不安にする様な書き方だ。噫、何を僕が背負っており、僕自身を持ちこたえるためにどんな強さを僕

が必要としているかを誰が知ろう！どうすれば僕がそれを為し得るのか僕には分からない——しかし、僕に初めて、人類の歴史を真つ二つに割る思想が到来したのだという可能性がある。このツアラトウストラは一つの序文、玄関でしかない——到る処から僕の元気を失わせるものばかりがやってきたので、僕は自分で自分に元気をつけなければならなかった。あの思想に耐えるための元気をだ！何故なら僕はまだ、あれを発言したり叙述したり出来ることから遠く離れているのだから。あれが真であれば、或いはむしろ、真であると信ぜられるならば——一切が変化し転回するのであり、一切の従来価値が価値を奪われるのだ。——

この事態についてケーゼリッツは或る予感を、早い嗅覚を持っている。僕はこのことを彼の弁護のために書いているのだ。——序でながら、またしても僕を窒息させる諸体験^①があつた（僕はそれを前回の手紙で暗示した）、しかし僕はそれを乗り越えた。心から元気を祈る！

君の N

備考。僕には一人の式部官（一種の警官）が今や必要だということ は依然として変らない。そうでないと僕は絶対的孤独を選ばねばならない。

① 八四年一月に妹をサロメ嬢と和解させようとしたニーチェの意図が妹の手紙によって不成功に終った事件を指している。二〇六番を参照のこと。

二〇〇、ニーチェより

〔ニース、一八八四年三月三〇日受領〕

わが古い親友オーヴェルベックよ、僕たちのヴェネツィアの音楽家 *maestro* の問題は、僕が君に送った前回の手紙の如くではなくなっている。当時のプランを取り止める様に彼は専門家たちから言われたのだ。——今は彼は、イタリアの歌劇作曲家たちが作品を上演させるために取るのと全く同じやり方を取って、ミラーノのルカ出版社と関係を結ぼうとしている。一切の詳細は同封の手紙によって分かると思う、この手紙の中には彼のナウズイーカーの腹案についての非常に魅力ある言葉もある。彼は深さと力とを持っている——そして彼は、彼の健康さから見て、長い目的を設定することが許されている。

「可成り瘦せた」という君の言葉は、全く同じことが僕の身体についてでも生じていることを僕に意識させた。僕たちは——仕事をやり過ぎるのだ。そこに恐らく、僕たちの機械が周期的破損をせざるを得ない根拠があるのだろう。僕の心に最近浮かんだのは、僕が三年間に「曙光」、「悦ばしき知識」、そして「ツアラトウストラ」を作ったことだ。これ等の書が「リービヒの肉エキス」^①の概念に属することを考えるならば、僕は僕の「健康」に腹を立てることは許されない——むしろ不思議に思う！そして君の非常な仕事熱心に関しても全く事情は同じだ。

ニースを僕は固守する。ここは氣候的には僕の「約束の地」だ。ただしここでは大いに食べなければならないのであり、コルナーロ

式ニラ Cornaro 生きてはならない。

僕が次の時期に何処に在ることになるかは、今のところまだ分らない。印刷のことがあるために僕は、既に僕の眼には余りにも明るくなり過ぎてゐることももう少し我慢しなければならない。(序でだが、僕の半盲目のために僕はここで多くの同情を、そしてさらに手紙や口授における援助提供を得た。調子は悪い。)

君と奥さんに僕の誠実な友情を誓いつつ

F・N

僕はもう受領証の用紙を一枚も持っていない——或いは見つかることが出来ない。済まない!

① リービヒが新鮮な肉から水分、脂肪分などを取り除いて作ったもの。

二〇一、ニーチュエより

〔葉書、消印はニース、八四年四月二日〕

わが親友よ、前回僕は、さらに五〇〇フランここへ送ってくれる様にお願ひするのを忘れた。——

最近、僕の出版者に関する大きな不安が生じている。君も知っている様に、彼は四月一日までに、彼のところにある僕の金を僕の母へ払い戻すと言っていた。ところがだ!しかしこれについては別の時にしよう。——

いま美しい反ユダヤ主義運動が、財政的独立、弟子たち、新しい友人たち、影響への僕の見込を一切駄目にしてしまう。この運動はR・ワグナーと僕を仲違いさせた、この運動は僕と妹との徹底

的決裂の原因だ、等々々。うへー!うへー!

僕がこんな出版者を持つてゐることがウィーンで如何に非難されているかを、ここで知った。①

① 前年十二月からこの年三月まで親しく交わつたバーネット氏から聞いたものと思われる。同氏はウィーン生理学研究所助手で、当時はニース東方の町ウィルフランシュで生物研究をしていた。彼が婚約者に書き送つたニーチュエ見記は、妹のニーチュエ伝第二巻四八一頁以下に載せられている。

二〇二、オーヴェルベックより

バーゼル、八四年四月三日

親友よ、葉書を受け取つたばかりのところだと思ふが、それに書いた問合せは僕が今受けた葉書で済んだ。スイス紙幣をニースで損失なしに換金することは出来ないと思ふのだが、その種の紙幣をも、僕の記憶が確かだとすれば、矢張り送らざるを得なかつた。綺麗な札でないことは実に情ない。あれだけ高額のものになると綺麗なバーゼルの紙幣は殆どもう見られない、もっと少額のものとは大体更新されたのだが、それ等は僕の家にはそれほど多くないし、たとえあつても手紙を不必要にふくらませることにならう。君がこれから受け取ることになる残りの五〇〇フランは、君がその時までに別様に処理する旨を報せてよこさなければ、職工銀行へ持つて行くことにする。——シュマイツナーについての報せは本心に心配な報せだ、心配なのは君の身近に迫つてゐるらしい損失のためばかりでなく、このことが君のツアラトウストラの目下の印刷とからみ合つていて、

君の有害な出版者を遠ざければ山の様な面倒や不快なことが生ずるのではないかと懸念されるからである。せめて君の金の一部なりとも反ユダヤ運動の口から引き出す様にし給えよ、全部が今は取れないとしても。反ユダヤ主義者の諸氏は特に金の点では、彼等の犠牲者たちに文句をつけたがつている様に思われる。僕が言っているのは、彼等の歴然たる犠牲者たちのことだ。彼等の興奮の犠牲がアラハムの子孫だけでないことは至極当然のことだからね。君をちゃんと守り得る手段を君がゆるがせにすることなく、この問題の状態についてもっと良い晴れやかな報せをくれることが出来ればいいと思う。

ケーゼリッツの手紙を本当に有難う。彼が遂には世のために芽を出すことを僕は心から望んでいるけれど、それでも僕は、現代においては非常に有能な一人物は何れにせよ自分自身の道を歩まねばならぬばかりでなく、余裕をも、静かな余裕をもたつぷりと持たねばならないということを本気に確信している。その上に、この人物に對する僕の無限の信頼が加わる、それで僕は、彼の差し当たつての境遇が再び不明瞭なものに少々逆戻りすることをも我慢することに。非常に嬉しかったのは、ナウズイーカー計画がまだ生き残っていて、その上に実に美しい言葉で自らの生存を依然として証言しているのを知ったことだ。

リピナー^①が翻訳したミッキエヴィチの「タデーウス氏」を知っているかい？ 実のところ僕は僕たちの時代にこんな作品が生まれたことにすっかり驚いている。気分豊かな、真面目さ、素朴さの点で、

また本当に詩的な魅力の点で、僕たちの世紀の文学の中にこれに匹敵させ得るものを僕は一つも知らない、そして翻訳も僕は見事だと思う。昨晚フラウと僕の二人は、実に気持よく高められ元気づけられた、第八歌によつてだ。

心から君の元気を祈る

君のオーヴェル

① 原書の人名索引に欠けており、次の二〇三番の手紙では伏字になっている
ズィークフリート・リピナー (Siegfried Lipiner 1856-1913) は早くも一八七七年にウィーンにニーチェ協会を創ったユダヤ人作家である。ニーチェは七七年八月にリピナーから贈られた著書「自由になったプロメーテウス」(一八七六年刊) を読んで感激したが、間もなく両者は疎遠になった(リピナーがワーグナー派であつたため)。

二〇三、ニーチェより

(ニース、八四年四月七日)

月曜。

わが親友よ、本当に有難う！ ミッキエヴィチに関する君の示唆も丁度良い時にやってきた。ポーランド人たちについて実に僅かしか知らないのが恥ずかしい(この人たちは結局、僕の「先祖」なのに)—— ショパンに属し、ショパンの様に僕を喜ばせる一詩人につかることを僕は何と望んだことか！—— リピナーについては、つい最近非常に詳しいことを聞いた。外面的には「成功者」だ——。

しかしながら、現今の「蒙昧主義者」の典型的なタイプで、洗礼を受けており、反ユダヤ主義者で、敬虔だ(彼は最近ゴットフリート・

ケラーを敵意丸出して攻撃し、「真のクリスト教精神と信仰との欠如」を非難した！。リピナーは彼の影響下にある若者たち凡てを損うとのことだ——彼等を「神秘的なもの」へと駆り立てて学問的思考を軽蔑させるのだ。非常に「実際の」な底意のみを持っている人間で、「時代の徴候」を利用しているのだ。僕の報告は、彼を子供の頃から知っている或るウィーンの自然科学者から聞いたものだ。

シュマイツナーの態度については、新しいことは何も知らない。

この問題は僕には非常に苦痛だ、何故なら僕は、僕の母に實際的好意を示して僕たちの間を少しばかり改善するための良い機会が得られたと思っていたからだ。ところがまたしても反ユダヤ運動が僕を邪魔するのだ！！

さて、僕がニースを離れる時は目前に迫っている。僕のツアラトウストラの最初の見本をまだ待つ積りだ。くればいいのだが。しかしまたもや去年の様に一ヶ月ものストップということもあり得る。僕は、内緒の話だが、シュマイツナーの破産を期待している。その場合、僕たちの書物は何処へ行くのだろうか！

今度の冬については僕は既に可成りはつきりしている。多分同じ宿の同じ部屋だろう。その中において僕が必ずしも「隠者」ではない様な或る交際仲間をここに作り出すことがうまく行くかも知れない。プロヴァンス沿海地方 *littoral provençal* の気候は全く驚くほどに僕の性質に合っている。僕のツアラトウストラの最後の折返し句はこの海岸においてのみ作り得たものなのだ、「悦バシキ知識 *gaga scienza*」の故郷においてのみ。ランツキー（序でながら、

251

一個の詩人だ）は、既に来ることに決めている。ケーゼリッツを説得出来ればよいがと思う。もしかするとレー博士とサロメ嬢さえもだ、この人たちに対して僕は、僕の妹がまずくした事柄を若干なりとも償いたいと思うのだ。僕は今再び二人のことを耳にした、しかも喜ばしいことを（彼等はメラーン^③にいる）。サロメ嬢がこの春に、「宗教的感情について」の或る作品を出すのだそうだ——このテーマを彼女の中に見出したのは僕なのだ、僕のタウテンブルクでの努力がどうやら実を結ぶことは非常に嬉しい。

この冬の僕の交際は、僕の住んでいる宿の客たちによって与えられた。娘さんを連れたプロイセンの老將軍、この人は實際的事柄一切における僕の相談相手だった。老いたアメリカの牧師夫人、この人は毎日約二時間、英語のものを翻訳してくれた。最近アルバート・ケヒリーン夫妻（レラッパ^④）が実に親切にしてくれた。丁度今は、約十日間の予定で、或るツューリヒの女子学生の訪問を受けている、君は滑稽に思うだろうね——これは僕には有難い、僕を幾分落着かせてくれる、最近数ヶ月の内心の「大波」の後でね。彼女は——イルマ・フォン・レーグナー——ブライレーベンと親しい、そして彼女とサロメ嬢との間にはお互いの尊敬がある様だ、彼女は同様に、デーンホフ伯爵夫人とその母親とも非常に親密だ、勿論マルヴィーダとも。だから共通の人々 *personalia* がたっぷりある。昨日は一緒にスペイン闘牛を見に行った。

いやはやノ僕は今、次第に、結構な種類の手紙を受ける様になっている——この種の尊敬様式をドイツの青年の中に持ち込んだのは

252

R・ワークナーだ、そして僕が疾うに予言していたこと、つまり僕が幾多の点でR・ワークナーの後継者になるだろうということが、もう始まっているのだ。――

最近数ヶ月は「世界史」を勉強した、夢中になってだ、恐るべき結果も幾つか出てきたけれど。僕の注意を強く「世界史」に向けさせたヤーコプ・ブルクハルトの手紙は君に見せたかな？

夏にズイルス・マリールへ行ったら、僕は僕の形而上学と認識論的見解の検閲に着手する積りだ。僕は今や一歩一歩と多くの訓練をやり抜いて行かねばならない、何故なら僕は、僕のツアラトゥストラによって玄関を作ってやった僕の「哲学」の完成のために今後五年間を使おうと今こそ決心したのだから。

ところで、「曙光」と「悦ばしき知識」を通読した際に僕は、それ等の中には、上述のツアラトゥストラのための序論、準備、注釈として役立ち得ない様な文章は殆どないことを知った。僕が注釈を原典より前に作ったのは、事実だ。――
エマスンは如何、そして奥さんは？

君は君の健康について何も書いてくれないね？

君の友N

① ニーチェはこのニーチェ家の伝説に重きを置いたけれど、この伝説は全く根のないものであった。リヒャルト・ブルンク著「ニーチェ。青少年時代」(一九五三年刊)一六頁参照。

② パーネット博士。二〇一番の注①を参照のこと。

③ 八三番の注③を参照のこと。

④ 一七番の注①を参照のこと。

⑤ マイゼンブーク嬢によってニーチェに紹介されたレーザ・フォン・シルンホーファー嬢。

二〇四、ニーチェより

(ニース、八四年四月一二日受領)

古い親友オーヴェルベックよ、万歳だ、最後のツアラトゥストラの最初の見本が着いた――これは本当は君のものであるべきだ！

この中には一つの思想がある、僕がそのためにまだ可成り長く生きねばならない全く巨大な思想が。しかし僕なんか問題でない！
肝腎なのは――いや、これは君が君自身に言うだろう！

君のニーチェ

二〇五、ニーチェより

(ニース、一八八四年春)

親友よ、済まないけれど同封の手紙をナウムブルクの母へ宛ててくれないか、切手も貼って。手紙を母の手に到着させることが、約二ヶ月前からうまく行かなくなっているのだ。ちゃんと宛てた手紙や葉書がこの様に繰返し行方不明になることについて郵便局は何等の説明も出来ない。遂に僕は或る疑念に到達した、これ以上は言わないで置こう。①

ケーゼリッツは約二週間後にドイツへ旅立つだろう、彼が以前から或る結び付きを持っているドレーズデンの楽長の前で彼の歌劇を演奏するためだ。ここまできたことを喜ぶでしょう！このことは今

後はきつと自然に運ばれて行くだろう。

ヤーコプ・ブルクハルトに会ったよろしく、そしてツアラトゥストラが届いたかどうか尋ねてくれ給え。

新しい信奉者がいる、半||フランス人、半||イタリア人、半||ドイツ人でローマに住んでいる。名前はアラゴン。

心から元気を祈る

君のニーチェ

① 母宛の手紙が妹によって横取りされてしまうのであると考えるに到ってニーチェはオーヴェルベック経由の方法を考え出したのである。当時はニーチェと妹との間には完全に決裂していたのであって、和解は秋になってからである。

「母と妹へのニーチェ書簡集」(一九〇九年刊)五五九頁以下に載っている六月半ばの妹宛書簡は、マルウィーグ宛のものを妹が細工して自分宛のものに変えた偽造書簡である。シュレヒタ編ニーチェ全集第三卷一四二〇頁参照。

二〇六、ニーチェより

〔一八八四年五月二日受領〕

ヴェネツィア、サン・カンチアーノ新小路五二五六。

わが親友オーヴェルベックよ、全くもって実に素晴らしいのは、僕たちが最近の年月の間に疎遠にならなかったことだ、しかも、見受けるところ、ツアラトゥストラによってさえた。四〇歳頃に僕は非常に孤独になるだろうということ——このことについて僕は決してあれこれの迷妄を抱いたりしなかった。そして僕はまた、僕に不利な悪い事態が沢山これからやってくるということも知っている——野心家たち *ambitiosi* の愚かな誤った言葉を使うならば「最高

の栄冠を掴む」ためには何と高価な支払いをせねばならないかを僕は間もなく教えられるだろう。

その間に僕は、僕が征服した状況をうまく利用し、どこまでも利用する積りだ。つまり今の僕はヨーロッパで最も独立的な男であるという可能性が大いにあるのだ。僕の目的と課題は他のどんな人のものよりも大きいのだ——そして僕が大政治と名付けるものは、現在の事態に対して少なくとも一つの良い立場と鳥瞰的展望を与える。

生活の実際の面的一切に関してなのだがね、誠実な試験済みの友よ、どうか今後は僕に一つのことだけは得させて欲しいのだ、つまり、個人的顧慮からは出来るだけ独立であり自由であることだ。他ならぬ僕に関してツアラトゥストラの「堅くなれ！」という警告が何を意味しているかを君は知っていてくれると思う。一人一人を公正に扱い、結局は、まさに僕に最も敵意を抱いているものをこそ最大の親切さで待遇するという僕の意向は、過度に広げられ過ぎて、僕にも僕の使命にも次々と危険をもたらしている。ここにおいて、堅く鍛えることが必要だ、そして教育のために、時折の残酷さが。

済まない！自分自身について語る場合は、その響きは必ずしも良くない、その臭いも必ずしも良くない。

僕の健康は峠を越えた様に思われる。冬はニースで過ごすだろう、夏は、大きな図書館があつて僕が匿名で *incognito* 暮らせる町が必要だ(僕はシュトゥットガルトを考えたのだが、君はどう思うかね?)。今年は僕は依然として、僕の書籍入りバスケットの置いてあるズイルス・マリーアへまた出掛けることを考えている——僕の妹の厚

かましい介入に対して去年よりもうまく身を守れるものと仮定してだ。あれは実際、全く性悪な人間になってしまった。僕が妹から一月に受けた僕の性格の毒々しい中傷に満ちた手紙、レー夫人への手紙と好一對をなす手紙によって今や僕は十分にはつきりと事情が分かっているのだ——妹はパラグアイへどうしても去らねばならない。僕自身は、妹の味方をする凡ての人々との交際を断ち切る積りだ。

僕は今はもはや、僕自身に関しての「生半可な態度」の一切に堪えられない。

ここではケーゼリッツの家にいる、ヴェネツィアの静けさの中で、そして、あれこれの点で一種の理想的ヴェネツィアとさえ思われている音楽を聞いている。しかし彼は一層男らしい芸術へ向かつて成長している、結婚 *matrimonio* の新しい序曲は明るく、きびしく、そして火の様だ。

君の友 N

① 前年夏に妹がニーチェに見せてからレーの母親へ送った手紙。当時はニーチェはその手紙を賞めた。八三年七月一日妹宛及び七月二九日オーヴェルベック夫人宛の手紙参照。

二〇七、ニーチェより

ヴェネツィア、一八八四年五月二日

親友よ、僕のこの前の手紙が君を不安がらせたのは遺憾だ、僕は要するに非常に馬鹿な手紙を書くのだ。——僕の家族との問題を僕は厄介払いせねばならない——正常にし安定させるための親切この

256

上ない試みを繰返しながら僕はこの二年間、力の限りを尽してきたのだが、空しかった。ところで僕が歴史を知っている限りでは、僕と同等の人々の場合にはこの種の誤解は通例のことなのだ。全くまずいのは、他にまだ保たれている僕の殆ど凡ての關係が一つの回復し難い根本的誤謬の害を受けており馬鹿げたものになってしまっているということ。僕が今になって——やっ／＼と言わざるを得ぬ——理解したということだ。——しかし結局のところ僕の本當の困窮は別のところにあるのであってこの馬鹿らしさの意識の中にはない。この困窮は実に大きく深いものであり、こんなに悩んだ人間が今までにあるかどうかを僕が何時も疑問に思っているほどのものだ。「あらゆる事物の重さを新しく定めねばならない！」ということがどういふことであるのかを僕と同じ様に感ずる者がいるだろうか、自分の本質の一つ一つの繊維で感ずる者が。上の義務から即座に僕にあらゆる肉体的危険、監獄、その他が生ずる可能性があるということは、取るに足らぬことだ。というよりむしろ、そこまで行けば氣持がいい位だ。僕は自分に実に多くのものを望んでいるのだ、だから僕は自分が今までに為した最良のものに対しても感謝なんかしていない。そして数千年が僕の名において最高の誓をするところまでやらなければ、僕は、自分が何も為し遂げなかったものと考える。差し当たっては——まだ唯一人の弟子もいないけれど。

257

前進／別のことを話すとしよう。

僕は丁度良い時にヴェネツィアへやってきたのだ。何故なら僕は

ちの音楽家 *maestro* はいいを離れるのが難しいし、若干の総譜清書は全部済んだものと考えているから。彼は上演と上演可能にすることを殆ど考慮しない。そして僕が彼を一昨年秋にライプツィヒへ呼んだことが何と大事なことだったかが遅ればせながら僕に分かってきた——最初はそれが無駄だった様に思われたのだけれど。しかし無駄ではなかったのだ、あのことがなかったとしたら彼は、さらに二年間、不可能な音楽を作り続けたことだろう。ミラーノのルカ社との彼の「計画」が彼のヴェネツィアでの計画と同様に実際的でなかったことを僕は彼に直ちに証明してやった、この社がよこした絶対的拒絶ノの手紙によってだ。同じく、彼の音楽がそもそもイタリア人の前では差し当り不可能であり、その上、彼等のチマローザに対する彼等の敬虔さを傷つけるだろうということもだ。要するに、歌詞、終樂章、さらに効果に関係する多くの形式問題も含めての、ありとあらゆる点において革命が行なわれたのだ。その成果を総括するものとして、ひとつこの劇場プログラムを見てくれ給え

ヴェネツィアの獅子

ペーター・ガスト作の五幕の喜歌劇

クリスマス頃にドレーズデンで初演されるものと推測される。——僕はいまよくやったと言えないだろうか？

それにしても主要な点における一切が素晴らしい、否、驚くほどに良い。彼のもろもろの力の展開について僕は言っているのだ。そ

258

してちっぴけな趣味の残りかす、善良さのザクセン的支那的過剰その他を彼が一步一步拭い去るならば、僕たちは、ギリシャの英雄たちの精神を呼び出すことを自らに許し得る一つの新しい古典音楽の発生を体験することになろう。差し当っては、上述の作品によって彼はヴェネツィアのために一つの記念碑を打ち建てた。そしてその中の二〇の魅惑的メロディーがやがて「ヴェネツィア」の語及び概念と結び付くに到るであろうということは考えられる。——僕はここで、僕の美学的道徳を説く好機会を得ている、しかもつんぼの耳に対してでないことは確かだノR・ワグナーの大事業を、主義にまで転化した個人的な彼の欠陥から解き離さなければならぬ。この意味において僕は彼の業績に手を着きたいと思う、そして我々が衝突したのは「偶然」のせいばかりではないことを遅ればせながら証立したいと思う。

「神秘的分離主義者」という君の言葉を僕は喜んで迎える。僕はつい最近ケーゼリッツにこう言ったのだ、「ドイツ文化」なるものは全く存在しないし存在した試しがない——ペーター・ヴェンとゲーテを大いに含めての神秘的隠遁者たちのところ以外には——

君の、そして君たちの友

ニーチエ

二〇八、ニーチエより

アイローロ付近のホテル・ピオーラ^①

(僕は君の返事をここで待っている積りだ、八四年七月一〇日。)

259

『括弧内の文章は後から抹消されている』今日ここからツューリヒ、ホテル・ハービスへ向かつて出発、

そこに滞在する。

親友よ、調子は今まで悪かった（何時も病氣）——僕は既に君に二通の手紙を書いた、しかし幸いにも出さなかった。この高処の蒸し暑くて曇った天気は全く僕には不適だ。恐らく僕はさらにエンガディーンへ、或いはツューリヒへ向かうだろう。

ルツェルンから僕は、君の忠告通り、母へ手紙を書いた。——

僕は自分の慰め手であり励まし手である者を傍に持っている——僕の息子ツアラトウストラだ。君が休暇で出掛ける時には彼と一緒に連れて行ってくれ給え。僕がこの書によって、今まで言葉で言われた一切のものを超克したこと、そしてそれだけでは同書の最大の功績を挙げたことには決してならないことを君にも納得して貰いたいと思うのだ。

バーゼルは、というよりむしろ、以前の古い流儀でバーゼルの人たちが大学と交わろうと僕が試みたことは、僕をひどく消耗させた。あの様な偽装的役割は今では僕の自尊心に余りにも多くの犠牲を払わせる。

孤独の方が千倍もいい！そして止むを得なければ独りで没落するのだ！——

「僕の友人たちへの」一種の全く個人的な通牒によって僕の見解をいわば声明するという、僕が「白十字」^②で君に話した考え——あれはバーゼルの空気によって吹き込まれた考え、意気沮喪のための

考えに過ぎない。僕に関してはもう一言も発しない！「自己声明」を僕は既に、「悦ばしき知識」の最終部によって済ませたのだから。ニースでの講義という考えも絶望の緊急防禦的思い付きでしかない。思うに、根本において——どうして僕が今頃まだ講義をするということがあり得ようか！——

勿論、如何に僕が今後何年かを凌ぐべきかとなると、僕には入口も出口も分らない。しかし僕は既に困難に耐えてきたのであり、僕の発明精神が今度も僕を見殺しにはしないだろうと期待している、差し当って僕は深い深い憂鬱の中にある、どうしてなのかは殆ど言えない。僕がひそかに何時もこう思っていたためかも知れない、僕の生において僕が到達した地点においてはもはや独りぼっちではないのだと。つまり、そこにおいては僕は多くの誓願や誓約によって迎えられるだろうとか、僕は何かを創設し、そして組織せねばならぬだろうとか言った様な類の考えであって、僕はこれ等によって自分を慰めながら、ぞっとする様な孤独の時代を越えてきたのだ。その間に事態は違った具合になった。一切がまだ早過ぎるのだ、僕は新しい忍耐を発明しなければならない。そしてさらに忍耐以上のものを。——

感謝の念をもって君と奥さんをお思っている。

君のN

元気を！元気を！そして、難局ニ当ッテ沈着ヲ保ツ様ニ心掛ケヨ
aequam memento rebus in arduis servare mentem——と僕は自分に叫んでいる。

覚書。グリムの辞書よりずっと小さなドイツ辞書は何という名前だろうか、そして完結しているのだろうか？

「――」

① 聖ゴットハルト峠の南の町。ニーチェは六月一二日までヴェネツィアで過ごした後北へ向かい、六月一五日からバーゼルのオーヴェルベック家で病氣のため二週間以上滞在した後、七月二日頃、ルツェルンを経て、アイローロ付近のピオーラへ行つた。その後、七月一二日から一五日までツューリヒ、一六日にズイルス＝マリニア到着。

② バーゼルのホテル名。ここでニーチェがオーヴェルベックに永遠帰郷思想を話したことについてはベルヌリ書第二巻二一七頁を参照のこと。

二〇九、ニーチェより

〔葉書、消印はズイルス＝マリニア、八四年七月一八日〕

わが古い友よ、ズイルス＝マリニアに着いた――噫、この良い空
気！僕健康と僕の元気を不都合な氣候条件によって押し下げるこ
と以上に愚かなことは有り得ない。その証拠は僕の前回の手紙だ、
これに対して君は実に良く答えてくれたね、つまり僕自身の心から
の願いと寸分違わない。さて暫くはまたやつて行ける筈だ！「この
春の憂愁は去った！六月に雪片を降らせたわが悪意も去った！」と
ツアラトウストラは言っている、甚だエンガディーン的に！

君の N

① 第二部「賤民について」を参照のこと。文章は少し異なっている。

二一〇、ニーチェより

〔ズイルス＝マリニア、八四年七月二五日受領〕

親友よ、先日は君に、宛先は「ズイルス・マリニア、上部エンガ
ディーン」で十分だということを図書館員に知らせしてくれる様にと
お願いするのを忘れた。同じく、何時君が休暇からまたバーゼルへ
帰ってくる積りなのか、従って僕への次回の年金支払いは何時頃と
見込まれるかを尋ねることも忘れた。つまり僕は、今回は次の支払
い日まで足りそうもないと考えて悩んでいるのさ。ピオーラ溪谷と
ツューリヒで僕は恐ろしく多額の金をふんだくられたのだ。――そ
もそも僕は「旅行そのもの」を何と呪っていることか！旅行は僕を
どうしてか殆ど分らないのだが、疲れ果てさせる。――天候は今
まで僕に逆らった、それで僕はまだ回復からは遠い。どうして乗り
越えたら良いのか殆ど分らない日々があった。僕の敵、雲のやつ
ら――！

他方、僕が四〇年をふりかえって自分を幸福だと思ふ時が少なく
とも時々はある――多くの「打撲傷」を受けたのは勿論であるにし
てもどうやら突き抜けてきたことだ。この様な生の必然的結果は
最近数年の間に「爆発」せんばかりにまで立ち到った――如何なる
点においても噴火的に、そして殆ど破壊的にだ。しかしこの「殆ど」
というのが、僕の全生涯にはつきりと現われている特徴だ――結局
のところ僕は今まではまだ「勝利を収めている者」なのだからね。

僕は僕の諸問題の真只中にいる。善悪の世界は仮象の、そして遠
近法的な世界に過ぎないという僕の説は、それを考えると時折僕の

261

262

気が遠くなる様な一つの変革だ。

しかし君は君の仕事の最中にあるだろう、そして既に余りにも多くの時を君の氣違いじみた友に費さねばならなかった——僕はしばしばそのことを考えた、悲しい氣持でだ。僕のために、いわば「全生活を捧げてくれる」誰かがいて然るべきだ、そうすれば、わが親友よ、君も大いに助かるのだが。

僕が独りぼっちで狭い低い小部屋に坐している宵々は、噛むのに苦勞する堅い代物だ。

君と奥さんに（奥さんには、レミユザを補うものとしてフォン・アブランティッシュ公爵夫人の回想録 *mémoires* を勧めるのを忘れた）心から愛着しつつ

N

① 一七八四—一八三八。回想録で知られるフランスの作家。アブランティッシュ（ポルトガルの町）を占領して公爵になったジュノーの夫人。

二二一、ニーチェより

〔ズイルス＝マリーア、一八八四年夏〕

親友よ、昨晚君の手紙が来た、そしてそのおかげで僕はいつもよりも楽しい氣持で僕の孤独な食事を取った。夜は殆ど休めなかった、隣室で誰かが死んだのだ、絶えず人が出入りしていた、医者、牧師など。今日は昨日に続いて雨降りだ、僕の手はかじかんでいる、それでも何とか書けそうだ、職工銀行から二〇〇フラン出して欲しいのだ、安心のために。僕が九月に南へ——西へ旅行出来るかどうか

263

は、コレラとそして（七日間の！）検疫がどうなるかに懸かっている。この病氣のために僕は既に、ツューリヒ経由でエンガディーンへ来ることを余儀なくされた、ルガーノ経由の方がずっと近かったのだ。

「ペーター・ガスト」へは一週間ほど前に手紙を出した、彼のヴェネツィア音楽は快く僕の頭に浮かぶ、そして彼の歌劇の上演の証人、代父であり得ないことは僕にとっては辛い断念だ。

氣候は荒っぽい、そして僕が苦しんでいる不思議な消耗（如何にゆつくりと僕が僕の道を歩まねばならないかを君は信じないだろう——）にとつては、このきびしい寒さと苛酷さが一種の薬になる——少なくとも僕はそれを期待している。

今また僕の眼前に一緒になっている僕の「著作」を通読しながら、僕が満足をもって認めたのは、これ等の中に述べられている凡ての強力な意志衝動を僕がまだ自分の中に持っているということ、そしてこの点でも意氣沮喪の根柢は何もないということだ。その上、僕は、僕が自分自身に（特に「教育者としてのショーペンハウアー」において）前以て示した如くに生きてきた。君がツアラトゥストラを君の余暇に持つて行く場合には、比較のために、今挙げた書をも一緒に持つて行つてくれ給え（これの誤りは、実のところこれの中にはショーペンハウアーのことではなく殆ど僕のことばかりが述べられていることだ——しかしこのことを僕自身は、それを書いた時には知っていなかった）。たった今、綺麗に包装されて、書籍が届いた。君と奥さんの元氣を心から願いつつ

君のN

264

二二二、ニーチェより

〔一八八四年八月二〇日受領、ズイルス＝マリニアから〕

ズイルス＝マリニア、上部エンガディーン（日曜）

古い親友よ、金を入手した——早速やつてくれて本当に有難う。

健康は今回は良くなる心配がない、僕は奇妙な大消耗を依然として脱し得ずにいる。静かに横になっていること——これが、これまでの何年かの大いに歩き回ることに取って代った。「憂鬱な宵々」の問題（二六二頁を参照せよ）はまだ解決されていない。

ナウムブルクから全然手紙がこないことは有難い。しかし僕がまだこの関係において如何に打撃を受けており、そして病んでいるかを次のことが示している、この夏に母に手紙を書いた度に必ずその後では二日間ひどく病気になったのだ。一つのことの絶えざる繰返しが遂には僕にどんな影響を及ぼしたかを君は十分想像出来ると思う、つまり、人類の運命の上に張りめぐらされている偉大な感情の巨大な緊張の中にある僕の顔に繰返し繰返し手一杯の汚物を投げつけることがだ（しかも、高尚な感じ方をする者なら誰だつて讃嘆しながら尊敬する気持ちしか持たないであろうと思われる僕の行動の故にだ！）。

僕が人間的なまろもろの徳の標準を越えているにも拘らず自分を「弁明する」ということが僕にふさわしくないのは明らかだ、そんなことをする気には到底なれない。しかしまさにそのために僕は僕の家族との関係を完全に駄目にしてしまったのかも知れない。——自分があらゆる面から現在隔離されていると僕が感じているのでな

265

ければ、僕の肉親からのこの分離をこんなに辛く思ひはしないだろう。要するに、これにも打ち勝つことが、そしてあらゆる僕の運命を僕の使命のために「黄金に変え」続けることが僕の課題の一つだ。この使命が全くはつきりと僕の前に現われ、哲学の（そして従来哲学と呼ばれてきたもの以上のもの）巨大な全体が僕の眼前でばらばらに碎ける折々が、またもやあったのだ。今回、この危険極まる、そして困難極まる「妊娠」に当って、僕は都合の良い状況を寄せ集め、僕が知り得た凡ての太陽の光を僕に向けなければならぬ。また僕はニース、ヴェネツィア、バーゼルと跳び歩く様な気候的愚行を行なわぬ様に用心するだろう。要するにニースとズイルスを固守する様にしなければならない。

数日の間、レーザ・フォン・シルンホーファー嬢が僕を訪ねてきていた、グラーツの両親のところへ出掛ける前に。僕を笑わせ、そして僕によく親しんでいるおかしな娘だ。この冬彼女はパリで彼女の哲学研究を続けるだろう。

この夏僕は昼食を以前の様に独りで食べないで、むしろ他の人と一緒に食べている。僕が嬉しく思っている今の食卓仲間、老いたロシア婦人（皇后付きの宮中女官）で、シヨパンの本当の弟子だ。数週間トゥルンアイゼン＝メーリアン一家が僕の近くにいた。ズイドニー・フォン・ウェールマンも僕を訪ねてきた。また、一人の新しい「崇拜者」がいる、ビスマルクの勢力範囲内のプロイセン官吏で特許局に勤めている。そんなところだ、わが親友よ。僕はケーゼリッツからの報せを待ちがれている——いや、何と僕はこの音楽

266

を愛していることか、そしてこの音楽家をノコレラ検疫（七日間の）が僕を中ぶらりんな状態に置いている。差し当り九月末まではここで我慢しようと思う（余りにも早く冬と雪にならなければ）。それからニースだ。噫、ドレースデンだと言えればいいのだが！

感謝を捧げつつ、元気を祈りつつ

N

① この部分には不完全な箇所があり、ハンゼル版第三巻（一三七五頁）も同様に印刷した後に「原文ノママナリ」と注意しているが、ポグツハ「ニーチェとサロメ」一三三頁に従って *and* を *eyes* と訂正して訳しておく。

二二三、ニーチェより

「ズイルス」マリニア、一八八四年九月一四日」

親友よ、心からの感謝を先に！

全体的に見てこの夏は万事が僕のところでは前進した、そして主要目的が果された、勿論大いに健康を損じてだ、特に眼の突然の異常な視力減退が加わり、そのためシースと文通することが必要になった。しかし、パーゼルで僕たちが一緒だった時に残念にも僕が悩んだ全体的沈滞は直っている。僕は今は、僕の家族との不和を百倍も重大に考え過ぎたと思っている。満足顔をさせるには、妹とのランデヴーを提案することだけで足りた。ところで、永遠に繰返される僕の失策は、僕が他人の悩みを余りにも大きく考え過ぎることなのだ。僕の子供の頃から、「同情の中に僕の最大の危険がある」という命題の正しいことが繰返し裏書きされてきた（僕の父の異常

267

な性質の悪い結果かも知れない、父を知っていた人たちは皆、彼を「人間たち」よりも「天使たち」の中に算え入れたものだ。要するに僕は自分が同情によって経験した悪い数々の経験のために、同情の価値評価における、理論的に大いに興味ある一つの変改へと刺戟されたのだ。

この夏の体験と言うべきものはシュタイン男爵の来訪だった（彼はドイツから真つ直ぐにズイルスへ三日間やってきて、真つ直ぐにまた彼のお父さんのところへ発つて行った——或る訪問にアクセントを置く一つのやり方であって、僕を感嘆させた）。これは見事な出来の人間であり男であって、その英雄的な基調の故に僕には徹底的に良く分かるし氣に入る。僕に属し、本能的に僕に畏敬を抱いている新しい人物が遂に、遂に現われたのだ！今のところまだ余りにワグナー的 *trop wagnerise* ないとは確かだが、デューリングの近くで得た合理的訓育によって大いに僕への準備が出来ている！彼の近くにいて僕は、僕の生涯の課題には如何なる実践的課題が属しているかを絶えず実に強く感じていた、先ず僕が或る全く特定の素質を持った若い人たちをたつぷりと所有することが先決問題だ！今のところはまだそれを語ることは不可能だし、事実まだ誰にも語ったことはない。四〇歳になりながら凡ての自分の最も本質的な事柄を理論的なものも実践的なものも、秘密にしたまま引きずり回るといふのは、何と奇妙な運命なのだろう！——ツアラトウストラについてシュタインは全く正直に、彼が分かったのはその中の「十二の文であってそれ以上ではない」と言った。このことは僕を大いに得意

268

にした、何故ならそれは僕の諸問題と光明との一切が持っている名状し難い異質性を特色づけているからだ（偶然この夏は僕に何回か曙光と悦ばしき知識に関しても同じ証言をもたらした、「存在するものの中で最も異様な書物」だとの）。

他方においてシュタインは、例えば「第二の舞の歌」(第三部)を実に深く理解しているほどに詩人なのだ（彼はこれを暗記していた）。つまりツアラトウストラの快活さにこそ涙を流さずにはおれなくなるといふのでない者は僕にとつてはまだ僕の世界から、僕という人間から全く遠くにいるのだ。

シュタインは、彼の父親がもう生きていないとなったら直ちにニースの僕のところへ移るのだと、自発的に僕に約束した。父親のために彼は北国に、そしてドイツの大学に我慢しているのだ。

ダニエラ・フォン・ビューローからの伝言として彼が僕に話したところによれば、彼女は婚約を解消し、そして今は元氣を出すために僕の著「教育者としてのショーペンハウアー」を読んでいるとのことだ。

ケーゼリッツの運命は僕には大いに心配だ。今までの独立的生活は去った様に思われる、彼のお父さんの染色業がうまく行っていないのだ、彼は成果を挙げない限り再び家を出ることが難しい様だ。成果に関して言えば、現在優勢なワグナー主義は彼にとつて決して不利ではない。それどころか、僕自身が個人的に体験した様に、用意を整えてくれている様なものだ——繊細極まる、そして微妙極まる状態はワグナー以前にはまだ決してこれほどには輝いていな

かった、そして彼によって人々の眼がこれ等の光と色に対して開かれた後に初めて、僕たちのヴェネツィアの音楽家 *maestro* の芸術が何処へ向わんと欲しておりそして向わざるを得ないかを人々は知るのだ——彼の敵はむしろ、ドイツの意識的或いは無意識的な蒙昧主義と感傷主義の中にあり、例えばブラームスがサーヴィスしている様な二度目の煮出し汁の中にあり、そして要するに、一切の南国的なものに対して邪推深く——神経質に振舞うと共に「だらしなさ」をかき出す市民精神のドイツ的凡庸性の中にある。それは、僕の哲学が感知し得ている敵と同じものだ——彼等は僕においてもケーゼリッツの音楽においても明るい空を憎んでいるのだ。或るイタリア人が最近言った、「我々が空 *cielo* と呼んでいるものに比すれば、ドイツの空は一ツノ戯画 *una caricatura* だ」と。

万歳！ここに僕の全哲学がある！——

N

数日中に発つ、多分ニースへ。宛先は何れにせよ、ニース局留。
「神をめぐる戦い」H・ルー^①の小説（シュトゥットガルト、アウエルバッハ社）——シュタインがこれを話してくれた。——

① サロメ嬢はこの小説をアンリ・ルー *Henri Lou* という偽名で出版した。

二二四、ニーチェより

〔ツューリヒ、八四年一〇月四日〕

古い親友よ、一週間前からこのツューリヒにいる（ネプトウー
ン館）、妹との会見のためにだ——そして今までのところ僕たちの中
にもそして上にも多くの良い陽光があつた。ニースを去つて以来こ
の年はずっと、僕は肉体的にもここに調子の良かったことがな
かつた。僕はもう暫く留まる、それで金（一〇〇〇フラン）をニ
ースではなく、ここへ送ってくれる様にお願ひする（ネプトウー
ン館へ書留便でどうかよろしく）。

可成り多くのものを葬らねばならない、可成り多くのものをまだ
生き得んがためにだ——後者はどうしても必要なことから。

君の友ニーチェ

帰還と冬の半年とがうまく行く様にと心から願つている。——ニ
ースの好天だ！一八八四年一〇月四日ツューリヒにて。

（——僕の妹は殊勝な小動物だ。来年僕は妹を例の「海外」行き
で長く失うことになるだろう。）

（——シュマイツナーは「僕を」二〇〇〇〇マルクで売る氣でい
るが、「僕へ」の勇気を十分持ち合わせている買手が見付からず
いる。この二つのことは極秘 *privatisime*）

二二五、オーヴェルベックより

バーゼル、八四年一〇月七日

親友よ、一昨晩僕たちは帰つた、ツューリヒからの君の手紙は昨

日朝になつて僕の手に入った、だから同封の千フランを僕は出来る
だけ早く調達したのだ。君がツューリヒに妹さんと一緒にいるとい
う思い掛けない報せは僕たちの出発のちよつと前にもうミュンヘ
ンに届いていた。君が伝えている君の現在の好調さが続くといひね。

僕自身はこの休みは、今までなかったほど健康のことだけを考慮し
ながら過ごした、今度の冬を去年の冬とは違つたものにするためだ。

目下、この意図は達せられたという期待が断然持てる。この休みは
僕にとつて非常に良かった、ただし或る意味においてであることを
残念ながら付け加えねばならない。ところで今日のところは君に左

様ならを言わねばならない、何故なら僕はあれこれの仕事がわんさ
と溜まつており、僅かな言葉だけでもこの折に書いておこうと思つ
て書いているのだから。——さて今後君は何処へ行くのだい？また

このことをも序での時に報せて欲しいのだが、回り道をしてやつと
配達された非常に冗長な電報で八月に君の住所を僕の義母に問い合
わせてきたロズイーネ・フンメルという人は誰なのだい。最近（僕
の到着前に）大学の守衛のところにもその問合せがあつた、つま
り君の住所の。

フラウがくれぐれもよろしくと言っている、そして僕たちからよ
ろしくと妹さんに伝えてくれ給え。君に良い冬が与えられんことを。
誠実をもつて君のものなる

F・オーヴェルベック

二一六、ニーチェより

〔八四年一〇月〕ツューリヒ、ネプトウーン館（水曜）

親友よ、君と奥さんは帰宅して、数日前に出した僕の短い便りも受け取っていると思う。

今日は、一週間以内にケーゼリッツの歌「夜よ、おお、やさしき」を僕に届けてくれる様お願いする——ここでやっとこの耳で聴ける可能性があり、それを非常に懂れている。——

心から君のN

二一七、オーヴェルベックより

（一八八四年一〇月一三日）

親友よ、君の誕生日に對する僕とフラウとの心からの祝いを述べるべく、今日も一言のみだ、何しろ他の用事が押し寄せていて色々なことをする暇が全くないのだ。健康は少なくとも我慢出来る状態になったのだね、そして眼の方も、先日の報せにも拘らず今回はその点に触れていないから、非常な心配をせねばならないというものではない様だね。それで次の一年への僕たちの願いは何よりも先ず、君の生活が一層恒常的な喜ばしい形を与えられること、君にそれを可能ならしめ、特に君に、たとえ如何に小さなものであっても君と一緒に暮らす人々の仲間に入っているのだと感ずることを可能ならしめる何らかの方法が成功することに向けられる。目下君を楽しませているのは、僕たちが既にミュンヒェンで報された様に、音楽だ、それで君にとっては、今度出版されたフックスの「音楽演奏の将来

272

とその起源」の第一冊が二重に喜ばしいものであると思う。彼はこれを最近、ツアラトウストラから引用した自筆のモットー「私は未来の人々を是認する者を愛する」等を付して送ってくれた。この作は実に豊かな経験に促されて書かれたものであり、リーマンに刺戟されて或る腐敗に反対している、そしてこの腐敗たるや、音楽家と音楽教師が言葉によっても彼等の芸術について表現する才能と彼等の芸術に對する思想とをフックスと同じ位に所有している場合がもう少し多ければ、こんなにひどくはびこることは先ず有り得なかつたと思われる腐敗だ。君のために頼んだのが僕の手に入ったら直ぐに君に送る。この作は、古い韻律学者としての君にとつても大いに興味あるものとなるに違いない。——お望みのケーゼリッツの作も君に届くと思う、君がちゃんと保護してくれることを信じて送ったのだよ、これはかけ替えのないものなのだ。ところで僕はミュンヒェンで画家とも知り合つた、彼の兄とそっくりだ、特に振舞い方の全体が。残念なことに僕の出発の前晩に彼と会い損つたものだから、一度しか会えなかつた、それで彼の絵を知ること出来なかつた。どうか序での時にヘーガルとフロイントの両氏によろしく。

いつも君に誠実な 君の

オーヴェルベック

① つまり、ケーゼリッツ。二三四番の注②参照。

273

二一八、ニーチェより

〔ツューリヒ、一八八四年一〇月〕

親友よ、大急ぎで報せる、今週土曜、午前十一時半、音楽堂で、
「ヴェネツィアの獅子」序曲が演奏される。――

同時に、誕生日の祝辞を受けた感謝の挨拶の積り。

心から

F・N

二一九、ニーチェより

〔ツューリヒ、八四年一〇月〕

宛先、フランス、マントーン局留。

親友オーヴェルベックよ、近日中に出発する、南へだ。非常に良かったツューリヒの秋は今や（見受けるところ――）終りだ――昨日は恐ろしくどんよりして重苦しい日だった。実際僕はここへ来たことに心から満足している――遂に僕の使命の巨大な圧迫からの息抜きがまたもや得られ、従って新しい力の蓄積が出来た。だから僕は今までよりも決然として今回は冬に近づいて行く。僕はここで多くのことを為し、そして貫徹せねばならなかった、特にベーター・ガスト氏をここに落着かせることが差し当り必要だと分かった時にはね、つまり良いオーケストラのそばに、そして彼から元気を奪う彼の親族から離れた処にだ。ドレーズデンの件は失敗した、僕がケーゼリッツの代りに春にそこへ出掛けなかったことが腹立たしい。宝石を手にながら、それを受け取る様にさせるために乞食の如く、

274

ろつかねばならない一芸術家の立場は余りにも馬鹿げている。彼にそのことを免れさせるのが彼の友人たちの課題だ。（序でながら彼の序曲の音色は予期以上に見事だ。――彼は当地では、小さな太陽荘（そこには優秀なドルスコヴィチ嬢もお母さんと一緒に暮らしている）の綺麗な広々とした部屋に住み、女子学生たちその他と食事を共にして上機嫌だ、その中には夏にエンガディーンの僕を訪ねてきたウィルデノフ嬢もいる。ヘーガルは非常に親切で、フロイントも同様だ。ゴットフリート・ケラーにも僕は大いに感謝の念を抱いている。ジュネーヴの銀行家ケーケルト夫人は数週間前からここにいて相変らず僕に非常な好意を持っている。

275

シュマイツナーについては、同封の手紙をどうか読んでくれ給え。君の同意を得て出した手紙に対する返事だ。僕は――全く為す術を知らない。――

フックス博士は僕に直接彼の二冊を送ってよこした――高級な文献学のこの種の爆発に僕は喜んで耳を貸す様にしているのだけれど、まさに古い文献学者としての僕はリーマンの問題に対してフックスよりも十倍も懐疑的だ、そしてこの場合に何としばしば芸術家フックスの火の様な熱意が文献学者フックスを捲き込んでいるかを僕はひそかに笑っている。功績は、無意識のうちに一般的になっている或る芸術面での白痴性を突きとめたことであろう。しかしその様でない場所が何処にあらうか？例えれば誰が現在、僕のツアラトウストラを正しく「楽句に分ける」ことが出来ようか？――

この秋に最も気持が良かったものは僕の妹の印象だった、彼女は

この数年の諸体験をしっかりと耳の後に、胸の中に銘記しており、そして、これは誰の場合にも僕が特に尊敬することなのだが、如何なる恨みもなしにだ。この様にして減少していない昔ながらの情愛を再び見出し得るとは僕は期待していなかったし、そしてそれに価してさえないなかったかも知れない。

君と奥さんとに感謝しつつ

君の友

N

『一八八四年一〇月二二日の妹宛ニーチェ書簡（書簡集第五卷五七二頁）から分かる様に、恐らく一〇月二二日のものと思われるオーヴェルベックの一通の手紙がここに欠けている。

「今朝僕の古い友オーヴェルベックの誠実なそして実に心こまやかな手紙が着いた、それは主として、『僕が母と妹において所有している様な忠実で本源的な忠誠』が僕から失われなかったことに対する彼の心からの喜びを述べている」^①。』

① この部分に妹が付している脚注によれば、妹はツューリヒからの帰りにバーゼルのオーヴェルベック家に立ち寄り、そしてオーヴェルベック夫人に「激しい非難」を浴びせた。

二二〇、ニーチェより

（ツューリヒ、八四年一月初め受領）

わが親友よ、前回の手紙で僕は、シュマイツナーの文書を僕の母の住所宛に送ってくれる様をお願いするのを忘れた。その間に僕に

276

分かってきたのは、僕の著作を出来るだけ早くシュマイツナーから救済せねばならないということ、つまり、それ等を今売る様に彼を強制せねばならないということだ。（何故なら僕は、簡単に言えば、生きているうちに弟子たちを必要とするからだ、そしてもし僕の今までの書が釣竿として役立たないならばそれ等は「自らの使命を達しなかった」ことになるのだ。最良で本質的なものは人間から人間へと伝えられ得るのみだ、それは「公」のものではあり得ないし、そうあらしめてはならない。）

明晩（つまり金曜）マントーンへ出発。僕の住所は差し当り、外人館。

この滞在は成功だった、真の「休暇」だった、僕の思想の主要な引出しには錠をかけて、色々なことを学び、色々な愛情や親切を経験した——そして感謝で一杯だ、君に対してもだ、わが古い親しいオーヴェルベックよ！

君のF・N

二二一、ニーチェより

（八四年十一月一五日受領）

マントーン、外人館。

ここから君への僕の第一声だ、愛する友よ——偶然が僕に、十一月一六日が真近に迫っていることを今教えてくれたからだ。（その上僕は今、君が転送してくれたあの図々しい、僕がいつも原則的に無視してきたシュトゥットガルトのキュルシュナー氏の手紙を受け取

った——そして君の筆跡を認めて嬉しかった。古い親友よ、僕によつて今後まだ何が為され得るかを見ていてくれ給え。僕と交わることは益々厄介になるとしても、それでも僕は、君の性質の均勢のために僕たちの友情も釣合いを失わずに続いて行くであろうことを知っている。僕が本当に悲しいのは、君が今ではもう何年もの間病氣とひどい消耗の状態の僕ばかりを見続けてきたことだ——噫、僕の使命の途上における一步一步が恐ろしい代価を払わせるのだ、そして僕が僕の生を一層良く理解する様になった今では、この十二年間の僕の肉体的悲慘の一切がその様な代価と解される様に思う。必要なもの、慰めになるもの、元氣をつけてくれるもの一切における絶え間ない苦しい欠乏は、僕の習慣的な忍耐——克己主義によつて長い間圧縮された拳句、時々爆発する、しかも僕の見るところでは、新しい「妊娠」と「分娩」の後で常に最も激しい様だ。それで僕は今年三月からずっと内面的に病氣だった、僕にとって祝祭休暇の性格を持っていたツューリヒの明るかった数週を除いてだ。僕の周囲の親切な快活な人たちのおかげだった、その人たちの影響は僕にあっては澄んだ空の影響に匹敵する、例エバ *ad exemplum* ローマのシロッコに際してのマルヴィータ。

半盲の僕には危険であり堪え難いほどに刺戟が強かった帰旅は、ひどい三日間の発作によつて先ず支払われねばならなかった。今日もまだちゃんとしてはいないのだけれど、良くなりつつある。マントーンはニースに比べて僕に一層ふさわしいのだが、それでもニースへ移ることが外的事情のために必要になるかも知れない。差し当

277

つては、最初に挙げた住所だ。君と奥さんに誠実をもつて

N

二二二、オーヴェルベックより

バーゼル、八四年二月二日

親友よ、非常に長いこと君から何の便りもない様な気がする、そして君にはお分かりと思うが、僕は、君が万事を自分でやって行くのだと如何に分かつてはいても、僕たちの交わりにおけるこの様な中休みをさまざまな懸念を抱かないで過ごすことが出来ない。目下僕が心配なのは、君にとってあんなに良かったツューリヒの休みの後に君がどんな風に再び君の孤独な日々の仕事の中に入つて行つたかということだ。何しろ君が僕に前回手紙をくれたのは君がその中へ戻つたばかりの時だったのだからね。また、シュマイツナーとの君の交渉は今や大詰めに向かつて漂流しているらしい。既に生じている事柄一切から考えると面倒なことになりそうな気がするものだから、そのことがどうなっているのかをも僕は知りたいと思うのだ、君の著作の将来に關してばかりでなく、過ぎた事柄から生じてきている君の要求權に關してもだ。

ところで僕は実に思い掛けないことにめぐり会つた。ケーゼリッツの序曲を聴いたのだよ、嬉しいことだった、このことは君が以前に僕に勧めたことがあり、僕が当時その機会を逸しなければならなかった時には自分それを失つたものと思つたのだ。今月七日にツューリヒの合唱団ハルモニの音楽会で序曲が演奏されたことを

278

君はもう知っているかも知れない。日曜日で、音楽会は午後だった。万事申し分なかった、ただし僕がツューリヒで過ごした四時間は余りにも短かった。作曲者とは殆ど話すことが出来ず、僕が知っているツューリヒの音楽家たちの誰ともだった、僕は彼等からケーゼリッツの将来性について、或いは彼等のところでの彼の将来性について聞きたかったのだが。曲は現今全く稀な素朴さを持っていると思われた、演奏も良かった、そしてあの思わしからぬ音楽堂でない場所だったらもっと良かっただろう、あの音楽堂は少なくとも満員の時には思わしくないのだ、そしてあの日は最後の席まで一杯だったのだ、音楽堂の名が泣く。聴衆はあの曲が気に入った、そして僕は僕の拍手が他の拍手の中で聞こえなくなるのを知って嬉しかった。

279

曲の最初の悦ばしい祝祭気分がもっと入り込み易いものであればとは君も望んでいたのではなかったろうか？少なくとも聴き始めの時には一切がそこへ向かって合流して行くという様には必ずしも感じられなかった。ケーゼリッツが自身で指揮したのだが、ウェーバーかヘーガルの指揮の方が自分の曲には良かったらうと言っていた。自分自身から抜け出すことが彼には余りにも困難だから良い指揮者たり得ないという事情があるとも考えられるが——僕は彼があの高いい処に立っているのを見て心から嬉しかった。ただし彼が全体的にもっと進取的な気分の中にいて、特に音楽面でもっと忙しくやっていると僕には願わしかった。現在は歌劇の改作以外は一切が停滞している様だ、この歌劇はその運命に対する疑惑の圧迫下に遅々としか進んでおらず、当時は少なくともまだ完成からは随分遠かつ

た。そうであるだけに一層僕は、君がケーゼリッツをアンナベルクから引つ張り出して彼の芸術にとって有益な雰囲気の中へ移してやったことによって挙げた功績を納得した。事実彼はあそこで直ぐに小さな根を生やした、それ以上のことになればよいのだがノツューリヒの音楽家たちとの交わりに彼はいつも非常に満足しているとのことだった。僕たちはほんの短い時間しか話し合えなかったので、

彼は僕にもっと詳しい報告の手紙を出す約束した。しかしそれを僕はまだ受けていない。序曲の後は一五分しか聴かなかったツューリヒの音楽会の他には、僕はこの冬はブラームスの第三交響樂のために一度出掛けただけだ。この作曲家は氏神様 *Beatus locus* に好意を持たれている^①、彼の交響樂の中で僕はこの第三が一番気に入っている、少なくとも一番入って行き易い。他には君に伝えるべき出来事はなさそうだ。明日は昇任人事があつて、学部会議では恐らく、全く不快なそして僕には特にいやな議論が起ころうと思うのだが、君がこれに全然関係する必要がないということに君は何れにせよ異存がないだろう。僕の健康は全く期待以上に良好だ、フラウも元気だ。今週末また君のための五〇〇フランを受け取る、来年夏の期限について君が知っている価値がありそうなことは凡て来春までに報せる。^②一〇月一日以来入手した六〇〇フランの利子は職工銀行に預けてある。この手紙はマントーンに宛てる以外に手がない。新年に入って行くに当って僕たち二人は心から君も元気であつてくれと願わざるを得ない、何はさておき君が健康でそして上向きの思想と共に新年を迎えてくれる様に。

280

君の常に誠実な

F・O

- ① この土地では人気がある、の意であろう。
 ② ニーチェの年金は七九年七月から六ヶ年間のみを保証されていたのだから継続されるかどうかが懸念されているのである。

二二三、ニーチェより

ニース(フランス)、サン・エティエンヌ小路、ジュネーヴ館

八四年二月二二日

わが親友よ、君のこの前の手紙、君の誕生日の感情の美しい響きは僕の心に実に気持よく沁みた——僕は直ぐにもう一度書きたいと思つた！しかしこの冬の事実は、残念ながら眼病なのだ——その結果、読み書き一切の極度の制限だ。この病の原因については疑いの余地がない、つまりエンガディーンの僕の部屋には全然光が入らないのだ(黒い岩壁の直ぐ近くで、窓は小さいのが一つきり——)、あの部屋は僕が二度と住むべからざる部屋だ！或いはまた僕は夏に印刷の悪い本を読み過ぎたのかも知れない(形而上学に関するドイツの本を！)——マントーンの試みは失敗した、しかしこの失敗は非常に有益だった。ニースは前の冬と全く同様に、驚くほど早く効果的な影響を及ぼしている——そして僕は今や、僕がニースとエンガディーンを愛する所以は空気の乾燥であることを掴んでいる、つまり、リヴィエラとスイスとの最も空気の乾燥している場所であるニースと上部エンガディーンとは僕の頭にとって最も良いのだ。

281

これ等の地方が晴天日数の大きな数をも示していることは上述の空気の乾燥の大きいことと間接的に関連している。平均はニースが六〇ミリ、しかしマントーンは七〇ミリだ——調子は良い方だ、発作はここではずっと稀だ。

もともと僕にとってはニースの町はぞっとする感じだ、僕は防禦の姿勢で、そして町なんか存在しないかの如くに振舞っている。僕にはニースの空気と空とが重要なのだ。

アルバート・ケヒリオン夫妻がまた僕に親切だ、ズイーモン將軍も以前と同じだ。それから非常な僕の崇拜者パウ・ランツキ氏が僕の宿にいる、以前ヨーロッパ評論 *Rivista Europea* の編集者、従つて要スルニ *in summa* 文学者だ。しかし彼が昨日僕についての長いエッセイ(ハンガリーの或る雑誌に印刷された)を読む様にと僕に渡した時には僕は、去年やより非常な崇拜者で敬慕者のパーネ博士に対して為したのと同様にする他なかった、つまり、僕について書かない様に義務づけたのだ。僕は、新種のノール、ポール、そして「コール」を自分の周りに輩出させる気が全然ない——そして凡庸な熱狂者どもと一緒にいることよりも僕の絶対的隠遁の方が千倍も好ましい。——

282

君はシュタインの「英雄たちと世界」を読んだかね？——どうか読み給え。自分自身の発展について若干明らかにしているエマソンの割に大きな論文を僕はドイツ語に翻訳して貰っている(ペンで)。お望みなら、君と奥さんに見せてあげよう。心情と精神の豊かなこの様な素晴らしい大人物がきびしい訓練、本當の学問的教養を身につ

けることを遅れさせながら可能ならしめるために僕が力を貸し得るとすれば、何と良いのだろうと僕は思っている。あるがままのエマスンでは、一人の哲学者が我々から失われたのだ！

新年に移るに当って君と奥さんの幸を願いつつ、君の

N

五〇〇フラン（フランス紙幣）を従来の方法でここへ送ってくれるかね？――

① 実は「今年」である。八四年三月六日の会話（妹のニーチェ伝第二巻第二部四九〇頁参照）と五月の手紙（エーラー編ニーチェ書簡集一九一一年刊一二〇番参照）とにおいて為した。

② ノールとポールはいずれもワーグナーを崇拜している音楽著述家。「コー」は「たわごと」であるが、ここでは「下らんやつ」という意味で語呂合わせに使ったのだろう。「コノ人ヲ見ヨ」の「人間的」に関する項の第二節にも出てくる。

二二四、ニーチェより

〔八五年一月〕海岸のニース、聖エティエンヌ小路、

ジュネーヴ館

わが親友よ、今回は二通の手紙に感謝しなければならぬ――しかも一枚の葉書程度以上に長くなることは許されない。眼だ――そして残念ながら、要するに健康全体だ！今までのところ健康の点ではこの冬は失敗だ。

ランツキーは思慮深くて僕に大いに心服している男だけれど、長く一緒に暮らすには不向きだ。道化役の方がまだましだ。彼は日曜

にサン・ラファエルへ出掛ける、この町を僕のために偵察しに。彼は既にアジャクシヨを偵察してくれた。つまり結局のところニースは君の哲学者には堪え難いのだ！――品位がない！――大都會的喧噪――馬鹿げている！――ツューリヒにいる僕の音楽家についてのお報せに心から感謝する。彼の音楽についての「素朴」という君の言葉はまさに当たっている。

君と奥さんとに心から愛着しつつ

N

シュマイツナーについては数ヶ月来僕は何も知らない、そしてそれで満足している。ザンゲルハウゼンにいる優秀な法律顧問官である僕の伯父に、五〇〇〇マルクを出来るだけ救い出す様に頼んである。――新しい出版者？モーズー？！――「神よ憐れみ給え！」

覚書。金は入手した。有難う、古い親友よ！

実に嬉しかったのは、思い掛けなく――君の調子の良いのを報されたことだ、君の様になりたいものだ！

① コルシカ西岸の町。ニーチェに会う前にランツキーはここへ出掛けていた。
② ベルンハルト・デクセル氏。ニーチェの父の異母姉フリデリケが後妻に行つたデクセル氏（ニーチェの父が死んだ後、ニーチェ一家はレッケンからナムブルクのこの人の家へ移つた）の先妻の息子であるから、ニーチェの伯父ではないのであるが、ニーチェはこの息子の方に対しても、その父親に対して為したと同様に「デクセル伯父」と呼んでいる。

二二五、オーヴェルベックより

バーゼル、八五年二月一五日

親友よ、随分前から僕は君自身に関する数々の報せに感謝を述べないままできて、まるで僕がそれを感謝しておらず、その後の便りを悠然と待ち続けているかの如く思われるかも知れない。しかも今日この手紙を書くのは君の様子をまた知りたいという心からの願いのためだけであって、その他には手紙を書くのに今までよりも都合

284

のよい事情があるわけではない。否、僕が再び経験しているこんなに講義の多い学期の最近数週は、手紙を書く気にさせる空気を完全に薄めている。君についてまた何か知りたいという気持ちを刺戟するものは残念ながら矢張り心配の気持なのだ、君のこの前の便りがこの冬の経過に対する心配の気持を起こさせるのだ。こちらでは氣候が和らいできてから町の半数の者が不調になっている、最近僕らのフラウも数日間付き合った、今はまたどうやら良くなっている。天然痘も流行しており、これは、国民決議の結果行なわれた種痘強制の廃止に対して約一年前に警告した医者たちの名誉を高める。それで僕たちも、僕たちに再び与えられた自由を行使して最近また種痘をして貰った、だからそれも幾らかフラウにひびいたかも知れない。——ところで君にさらに伝えねばならないのは、君の年金の継続について問い合わせた結果だ。ホイスラー基金の一〇〇〇フランは全く従来通りに継続される、恐らく大学協会の一〇〇〇フランもそうなるらしいが、これについて僕に約束された決定的報告を僕はまだ受け取っていない。しかし三番目の一〇〇〇フラン（国の分担）は意

外にも、理事長が最近ハーゲンバッハに伝えたところによればまだ今年の予算に計上中で、従って七月一日を過ぎてからになるとのことだ、そして両氏共に、彼等としてはこの問題には触れないで、何らかの面からこれに対する警告が出るかどうか任せすることに彼等の間では一致している。七月一日の期限の時には君或いは君の委託を受けた僕の側で何か然るべき方法を講ずべきかを僕が最近ハーゲンバッハに尋ねた時に上述のことを知らされたのだが、彼は君に、君の方もそのことを頭に置きながらやって行ってくれる様にと言っている。とも角も僕たちがまた春に少々預金出来る様なら工合が良いと思う。君は職工銀行に目下二四〇フラン持っており、三月までにさらに五〇フランの利子が僕のところに入ってくる。だから、君が三月末に期待できる一〇〇〇フランの中の約二〇〇フランを無しで済ますことが出来れば、僕は君にまた宜しき債券を買ってあげることが出来る。——パウムガルトナーは三週ほど前からウェネツィア付近のメキタル派の聖ラザロ修道院にいて、ホレーンのモーゼスの手記の照合を行なっている、そして多分、再来週帰ってくる。彼は最近、自身についての非常に良い便りをよこし、のどが乾いて眠れないリード^③の水不足についてだけひどく不満を述べていた。——ケーゼリッツからのこの前の便りは今年の初めのもので、それには真っ先きに、僕の「夜よ、おお、やさしき」が耐えねばならなかった色々な危険のことが書いてあった^④。再来週はこの謝肉祭で僕は三日休みがあるから僕たちのところへ来る様に彼を誘う積りである。近くヤーコプ・ブルクハルトが近代肖像画の始まりについてという

285

講義でこの冬の連続講義を終える、全然講義をやめることになるのでなければ幸いだ。彼の足取りは本当に老いてきて、これ等の講義の重荷が彼に非常に辛いのはつきりしている。彼はしばしば君のことを尋ね、そして繰返しよろしく言ってくれる様に僕に頼んだ。フラウからも同じことを言われているから僕は果さねばならない。どうか、親友よ、この手紙を長いこと書かなかったことの仕返しをしないでくれ給え。

いつも誠実をもつて君のものなる

0

- ① 一八世紀のアルメニアの僧。
地名ではなく、氏族名であろうとのこと。東洋学報四七巻四号五五頁参照。
- ② 七一の注①を参照のこと。
- ③ 七一の注①を参照のこと。
- ④ ベルヌリ書第一巻三七二頁を参照のこと。

二二六、ニーチェより

ニース、一八八五年二月二〇日、金曜

親友よ、また君の便りを貰えて心から嬉しい。僕の生活は今、ごく稀にしか報告や手紙がやってこないという点において甚だ島暮しに似ている。僕の以前の友人や知人の大多数はもう僕に属することを欲しないか、或いはそれが出来ないかのどちらかである様だ。要するに、彼等は黙っている。僕自身は僕の眼病の暴虐の下にあって、書くことを許されない（僕の懸念は小さくはない、僕は何時か全く突然に盲目になるのではないかと恐れている——内緒だよ！）

286

今度の冬はニースとしては出来が悪くて、非常に珍しい。五〇年のこのかた無かった様な津波、二回の地震。二日乃至三日続きの大長雨がもう四回あった——ここでは未曾有のことだ。あらゆる病人が一層病気になるっている。曇天が多い。僕自身は多くのものに耐えてきた、感心なランツキーのいることが（彼は次の月曜に発つ）あれこれのものを乗り越える助けになった。しかし僕は後者の点では検算をせねばなるまい——要スルニ *in summa* 僕は、僕にとってまだ可成りの間（五年と言っておこう！）完全な孤独が如何に必要かを知ったのだ。僕の中にはまだ化膿し癒着しようとして欲しているものが余りにも多いのだ、「弟子と学校」ソシテコノ種ノ凡テノモノ *ei hoc genus omne* のための暇はまだ無いのだ。

287

「シュマイツナー」の件はうまくない、僕の伯父は「殆ど不可能」、「この上なく面倒」と書いてきた。実を言えば、全く思いがけなく来た君からの金の報せは実に好都合な時にやってきたのであって、僕を安心させてくれた。

その上にまづいことは、僕が今や出版者を一人も持っておらず、そしてドイツにおける僕の文筆的評判についての僕の知識が十分確かであるとすれば今は一人も見つからないだろうということだ。誰一人として——それだけの勇氣はない。

数日たてば *con puncto* もっと多くのことが分かる筈だ、何故なら僕は幾つかの交渉を開始したから。

ところでだね、わが親友よ、印刷すべきものが可成り前から出来上がっているのだ。表題は君を申し分なく啓発するだろう。

正午と永遠

第一部

ツアラトウストラの誘惑。『後に「ツアラトウストラ如是説」第四部として出版された。二九六頁参照。』

四月に僕はちよつとの間ツューリヒへ行こうと思っている、そこには処理せねばならないことが色々あるのだ。今年は実際的な問題が次々と続いてくる、その一部は御存知の家族問題のために生じたものだ。僕はドイツへ行くことになるだろう、恐らく最後の長期滞在だ。四半期の金から、どうか債券を買うのに必要なだけを取り除いてくれ給え。残りをここの僕に送ってくれ給え、出来ればフランス紙幣で。

ペーター・ガストから最近手紙を貰った。歌劇の三つの幕のピアノ抜粋曲が出来上がっている、後の二つは作業中。僕はそれ等をたずさえて、ドイツの指揮者たちのところで運試しをする積りだ。この歌劇を「結婚させる」ことが僕の夏の計画の一つだ。奥さんに心からよろしく、君にいつも心から感謝しつつ愛着している

N

この夏にズイルス＝マリーアの僕の部屋に住んでくれる人を誰か知らないかね？（一ヶ月三〇フラン。）

二二七、オーヴェルベックより

バーゼル、八五年三月二八日

親友よ、今僕はやつと君の金の国庫支払分を受け取り、君に同封

288

の七〇〇フランを送るために急いでいる。君の前の手紙で報されて驚いたこの春の諸計画があるのだから、君は恐らく、君の色々な処置を遅滞なく取り得る立場に立ちたいと思っているだろう。今君のために受け取った一〇〇〇フランの額の中から僕は君の指示に従って五〇〇フランの中央鉄道の四パーセント債券を買うために必要な額を差し引いた。これにさらに必要な残りの二五〇、五フランを供給したのは職工銀行にある君の預金——この控除の後にまだ九〇フランある——と二月及び三月に僕のところに入ってきた利子とだ。債券も既に入手している。一八七六年の社債一五六九五一番で、五〇年間に於けるこの抽籤は来年ようやく始まる。君はこの社債を既に一枚僕のところに持っており、その他にそれぞれ一〇〇〇フランのバトゼル債券を二枚、そして同額のツューリヒ州立銀行債券を一枚、これは来年君の側に解約告知権が生ずる。凡て四パーセントだ。評議員会は前回の会議でホイスラー基金からの今年分の一〇〇〇フランを認めた、そしてそれが今後も同様に維持されるであろうことは全く疑いない。大学協会からはまた三年間一〇〇〇フランずつが君に保証されている。国の分は残念ながらその後も、僕が最近既に報せた不安定な状態のままで。しかし次の七月一日には君はまだ兎も角も通例の五〇〇フランを期待出来る。一体シュマイツナーとの穏便な協調は全く不可能になり君の資金の全部が危険に曝されているのだろうか？——ケーゼリッツがあのように突然姿を消した後でもまだ君はツューリヒに滞在するという意図を固執しているのだろうか？実を言うと、僕に二週間前にヴェネツィアへの帰還を、

289

しかも出発の前の晩に報せてよこした彼の葉書は本当に僕をびっくりさせたのだ。年の初め以来僕は全然もう彼から便りがなく、ここでの僕の講義が終つたら——これは一週間前の今日やつと終つた——直ぐに彼に、この僕たちを数日訪ねてくれる様に勧める積りだった。今回の逆戻りは非常に危険と思われる、少なくともケーゼリッツの上演計画にとつてはだ、動機については葉書は一言も触れておらず、僕は今もまだそれについては辛い闇の中にいる。彼の元のヴェネツィアの住所へ手紙を出せば彼に着くものと思うから近く手紙を書く積りだが、今日の送金に対して送って欲しい受取りの返事と同時に君が何か知っていることがあつたら一言述べてくれると非常に有難い。——君のツューリヒの仲間のことを僕は最近他の方面からかとも思い出させられた。フォン・ザリス＝マルシュリーンス嬢が学長宛に、僕たちところで講義を、特にブルクハルトの講義を聴く権利に関して問い合わせてきたのだ。ブルクハルトは今月十九日の評議員会で先ずそのことについての考えを述べなければならなかった、そして大いにこの女性を賞めて彼女の意図のために弁じた。しかしながら彼女は投票の大差で落ちた。入学許可の問題ではなかったにも拘らず、そのことから生ずるかも知れないさまざまな結果のために皆がしりごみしたのだ。——ローデが二、三日前からここにいて、明日また帰って行く。彼は本当に元氣に見える、秋よりも遙かにだ、ここではフォルケルト家と僕たちのところとで過ごし、君にくれぐれもよろしくと言っている、そして近く君に手紙を書くとのこと。——この冬にも君のツアラトウストラが新しい芽を吹き

290

出させたのを見て非常に嬉しい。君がその様に活動しているのを知ることが僕たちに何時も最大の安心を与えてくれる。フラウが心からよろしくとのこと、そして僕の君への誠実は常に変わらない

F・オーヴェルベック

二二八、ニーチェより

(ニース、一八八五年三月三十一日)

凡てが無事に着いた、僕のためのこの入念な配慮の一切に対し、古い親友よ、僕は感謝する。君は、君と奥さんの健康について何も書いていない、僕はこのことを、君たちがこの異常な冬を僕よりもうまく凌いだ良い証拠なのだと考える。僕には、多くの超克、多くの病氣の日々があつた。眼は益々重大事態だ。シースの薬は何の役にも立たなかった。去年の夏以来、僕には分からない或る変化が生じたのだ。斑点、ヴェール、涙漏も。僕は二度とニースへ来てはならない様に思う。ひかれる危険がここでは余りに大きいのだ。食事の時には僕はいつも食物を自分の前に置いて貰わなければならない、こんな状態では僕はもう他の人と一緒に食事をする氣持にならない。

291

恐らく僕は北方への旅をやめるだろう、一人旅の危険と苦勞が今の僕には大き過ぎるものになってしまった。——フェルスター博士がパラグアイから帰ってきた、ナウムブルクでは大喜びだ。僕の妹の結婚からは僕にも良いことが生ずるかも知れない、彼女は両手一杯にやらねばならない仕事を持つだろうし、完全に信賴することが

許され実際に役立ってあげることが出来る人を所有することになるだろう。この二つのことは今まで僕との関係においては必ずしも可能ではなかった。

シユマイツナーに対しての訴訟について僕は新しいことを何も聞いていない。彼は最後には自分から一月一日を期限として設定していたのだが、それをまた以前と同様に過ぎ去らせた、「すん」とも言わずに。——僕が一番望んでいること、僕の最初の三部のツアラトウストラを彼の手から、そして同時に「公開性」から取り戻すことは達せられるかも知れない。

勿論、第四のツアラトウストラには出版者は見付かっていない。

ところで僕はそれに満足しているし、それを新しい幸福として楽しんでさえている。僕は出版の度ごとに何と多くの羞恥感に打ち勝たねばならなかったことか！僕の様な人間が一つの深いひそかな生活の総和を出すとすれば、それは飛び切り選り抜きの人々の前で為されなければならぬ。要するに、急ぐには及ばない。弟子と後継者への僕の欲求は時折僕を苛立たせる、そしてこの数年間には僕を生命に関わる様な愚行『サロメ嬢を自分の弟子に仕上げようとの試み』にさえ誘い込んだ様だ。結局は僕の使命の巨大な重みが、繰返し僕を均衡状態へと連れてくる、そして何よりも先ずこれだけは必要であるものが何であるかを僕は完全に知っている。——

僕は今度、気晴らしに、聖アウグスティヌスの告白を読んだ、君がそばにいないのを実に残念に思いながら。おお、この古い修辞家よ！何とまやかしてあり偽善的であることか！何と僕は笑ったこ

とか！（例えば彼の青年時代の「盗み」についてだ、結局は学生時代の物語の類だ。何という心理学的まやかした！（例えば彼が一つの魂を共有していた彼の最良の友人の死について語る時だ、「彼は生き続ける決心をした、そうすれば彼の友人がすっかり死んでしまうことにはならないから」。こんなことは吐き気を催させる虚偽だ。）哲学的価値はゼロに等しい。賤民化したプラトン主義だ、つまり、最高の精神的貴族階級のために考え出された思考法が奴隷的な人々のために整備されているのだ。序でながらこの書を読むとクリスト教の腹の中が見える。その際に僕は断固たる医者及び生理学者としての興味を持って見ている。——

僕をも一枚の葉書でびっくりさせた僕たちの「逆戻りの」音楽家の突然な失踪には僕は腹が立った。結局どうにも仕様がないう、僕はまた去年の様にヴェネツィアへ出掛けて、何が一体不足だったのかを見て取らねばならない。ところで僕たちは公正でありたい。彼は数年来、楽譜書きとしての不面目な大同然の生活をしている。彼が度を失ったとて何の不思議があらう！一個の生産の人間の最も生産的な時期に、全く別のものが必要なのに、途方もない楽譜の清書をし、ピアノ抜粋曲を作製していることは、僕には一つの苦しみだ。こんな悪い目にはR・ワーグナーは遭わなかったし、ブengelト氏でさえその様な目的のためには他の音楽家や楽譜書きの人たちを雇っている。金が不足なのだ——ソレダケダ *voilà tout*！だからこそ、この「ヴェネツィアの獅子」は先ず公の咆哮をせねばならないのだ。そして僕は出来るだけのことをする積りだ。

292

293

フォン・ザーリス嬢の処置については笑ったよ。これは挑発スパイ達 *agents provocateurs* の精巧な手口の一つだ、彼女はまさしく彼女が得た当のものの、つまり拒絶をこそ欲したのだ、それを「煽動」に利用するために。

君と奥さんが友情をもって僕を考えてくれることを願いつつ、いつも君の

ニース、一八八五年三月三十一日。

F・N

二二九、ニーチェより

〔葉書、消印はニース、八五年四月八日〕

ニース、水曜。

わが親友よ、明朝出発する、多くの悩みと自己超克とに満ちていた冬がまた去った！——眼は最悪状態にあり、あらゆる都市の中で最も暗い都市、ヴェネツィアへと心がはやる。——ジェーノヴァのために一日取ってある、この町に僕は深く感謝しており将来もお互いに気が合うかも知れない。宛先は、ヴェネツィア局留。

心から君のN

二三〇、ニーチェより

ヴェネツィア、一八八五年五月四日

君の手紙によって非常に慰められそして非常に安心した、何故なら時折僕に、君がツアラトウストラの著者を気が違ったと思うかも

知れないという疑いがやってきたから。僕の危険は事実非常に大きいけれど、その様な危険ではない。しかし確かに僕は自分が、問っているスフィンクスなのか問われているあの有名なエーディプスなのか、もう分からなくなることが時々ある——だから僕は深淵に対して二つのチャンスを持っているわけだ。今や、成る様に成って行く。——

オランダから送られてきた手紙、ハールレムの植民博物館の長であるヴァン・エーデ氏という老紳士の手紙は例の「忠誠の手紙」の一つだった、こういう手紙を貰うと僕はいつも自問するのだ、この同じ種類の人たちは僕が何をゆっくりゆっくりと準備しているかを突然知れば僕を死神の如くに憎まないだろうか、と。——僕にはこの種の喜びも疾づくにいやなものになっている。——眼はここではニースよりももっと悪い。僕は我慢出来そうな住居を探しに探したが全然見付からなかった、——この様な事柄では、僕たちのケーゼリッツも僕にうまく助言したり助力したりすることが出来ない。彼は手に負えない不器用者だ、そして交際向きでない、——しかしそれだからと言って彼に対する僕の愛が減じはしない。彼自身の事柄においても彼の振舞いは他人の事柄におけると全く同様に軽率で不器用だ。彼は自身の作をベルリンのフォン・ヒュルゼン氏に送ろうと殆ど決心していた。これは僕には、長い間二度とそのことを何も聞かずに済むための手段の様に思われた。僕は彼に、完全に出来上がっている（見事な出来栄えの）ピアノ抜粋曲を例の楽譜出版者で以前の名演奏家リース（ドレーズデン付近）へ送ることを勧めて

いる。この人は彼に好意を寄せており、特にこの人がピアノ抜粋曲を印刷すれば劇場と作曲者との仲介をするのに最適な人なのだ、——非常に世故にたけた、そして名の売れている男なのだ。——曲そのものの及びそのモーツァルト的完全性について僕は幾ら聞いても聞き飽きない、しかし僕がこの様な音楽を他の人たちよりも必要としているからかも知れない、そしてその限りではその価値を決定する資格に乏しいかも知れない。——全く驚くべき或る成果を僕は最近収めた、ランツキー氏の手紙によつてだ。彼のための努力が、そして結局それと同時にニースのこの冬が、僕のその他の努力と同様に無駄だったのだと僕は思っていた、——ところが、どうだ、そうはならなかったのだ。彼は逆向きになった人間の様な手紙をよこした、彼の「悲観主義」から解放され全く真面目な学問的生活へと決心して（彼はもう若くはないのに）。何もかもが良くなっていた、筆跡さえもだ。彼は大いに感謝しながら書いていた。——「神をめぐる戦い」を僕はまだ見ていないし、今のところ見たいと思わない。筆者には、実にさまざまな方面から尊敬の言葉が寄せられている。そして君の奥さんがこの種の半小説的な回想録の故にサロメ嬢にまたもや幾分良過ぎる評価を与えておられるとすれば、それは僕には心から嬉しいことだ、遂に彼女は僕がタウテンブルクで彼女に望んだ通りのことを果したのだ。何れにせよ彼女なんか悪魔にさらわれるがいい！——五月二二日『ワグナーの誕生日』に僕の妹の結婚式がある、君はこの日付を知っているね。僕にこういう希望が述べられてきた（「結婚の贈り物」の類をするには何を贈ればよいかと僕

が問い合わせた時に）、つまり君が持っているあのデューラーの版画「騎士と死と悪魔」をこの二人の移民が貴重な勇敢な目標として新しい遠い故郷へ持って行きたいというのだ。君の手からそれを取ることは僕には実際非常に悲しいことだ、何故なら君は君なりのやり方で一個の船乗りであり孤独者なのであって、結局のところ何らかの移民と全く同様にその様な慰めになるものが入用なのだからね。しかしそれは君の趣味には陰気過ぎるかも知れない、そんなわけで、もし良ければそれを僕の妹に送ってやつてくれ給え。——

シュマイツナーに対しての僕の訴訟は、今報されたところによると、驚くべき展開をした。シュマイツナーのお父さんが保証人として責任をとった、そして六月に五六〇〇マルクが支払われるとのことだ。それだから僕は先ず僕の第四のツアラトウストラの印刷代を払う積りだ。この作はファイナーレの積りだ、第一部の「序説」をどうか読んでくれ給え。君に最初に書いた表題は、三つの部を予め手に入れなければ絶対に「第四部」を出版しそうもない出版者諸君に對する一種の「謙譲」だったのだ。

奥さんに心からよろしく、そしてその他にバーゼルで僕に好意を持っていてくれる人があれば。はっきり言う、僕はブルクハルトにも、バーゼルの誰か他の人にも一部も送らなかつた——どうか、第四部が存在するという事実を隠しておくとしよう。

感謝しつつ

宛先はケーゼリッツのところと同じ、

君の友 N

ヴェネツィア、サン・カンチアーノ新小路五二五六。

① ヴェネツィアで校正を終えたツァラトゥストラ第四部は私費で四五部印刷された。「最も個人的なものに属する」(八八年一月八日ブランデス宛)この書を五月に受け取ったのは、ガストとオーヴェルベックの他には、ナウムブルクの家族、ゲルスドルフ、ランツキーであった。その後七月にウィーデマン、八年になつてからブランデスとフックスが受け取った。

② 「母と妹への書簡集」(一九〇九年刊)の四〇七番でニーチェは、オーヴェルベックへ依頼の手紙を書いたことを妹に報せている、そして同時に、妹夫妻にツァラトゥストラ第四部を直ぐに送ることをも報せている。ところがその手紙は四月のものとなつており、シュレヒタは彼のハンゼル版第三卷一二三二頁以下にそれを矢張り四月のものとして転載している。しかしその手紙はオーヴェルベックへのこの五月四日の手紙以後に書かれたものであることは明らかであり(五月四日にはまだ転居していないニーチェが、妹宛の手紙においては既に転居済みである)、このことは、妹宛ニーチェ書簡に対するシュレヒタの検閲が十分でないことを証する一例である。

二二二、ニーチェより

(七月二日)ズイルスマリニア、

上部エンガディーン(一八八五年)

古い親友オーヴェルベックよ、君から音沙汰がないので不安になる。そして少なくとも僕が望みたいのは、君の健康が何等この沈黙と関係を持っていないことだ——今年の暑さ、そして僕が昨年六月に再び知ったバーゼルの、ひとを無力ならしめる悪い空気の思い出は、その面でも僕に色々心配な考えを起こさせるのだがね。この高地に着いた時に僕が最初にやったことの一つは、君の「タイヒミュラー」を探すことだった、残念ながら無いことが分かった——そこ

297

でこれはニースの書物箱の中にあるという結論になる、このことをこの手紙で君に伝えねばならないのは非常に残念だ。その代りにここには、君の蔵書の中から借りているマインレンダーがある。デューラーのものを僕の家族に送ってくれたことには今もって非常に感謝している。それによつて僕は「結婚の贈り物」という概念を遙かに越えたものと信ぜざるを得ないほどの大した感謝をされた。しかし、若い二人の将来が、この不気味な絵の暗示しているところよりも喜ばしく希望に満ちたものになればいいのだが、内緒だが、僕は多くの懸念を抱いている——、勿論若干の奇妙な望みもある、他ならぬこのパラグアイの新世界「ニーチェの妹は、パラグアイに植民地「新ゲルマニア」を建設したベルンハルト・フェルスター博士と結婚した」に関してだ。忽ちにして今にも僕にはヨーロッパが不可能なものとなるかも知れない、その時にだね、その遠方の地には僕のような飛び迷った鳥にも一本の枝が見出されるかも知れない。(「かくて我は曲れる枝に休らう」^①云々と記されたる如く。)

この高地で僕は再び去年と同じ、僕に非常に好意を持つてゐる交際仲間を持つてゐる。普段はジュネーヴに住んでいる二人の高貴な英国女性と、そしてシヨパンの一番近い弟子の一人だと君に報せたことのある例のロシア宮廷の老婦人だ、——音楽との彼女の関係は冗談ごとではない、つい先月も彼女は力強い厳正なフーガを作曲した。今僕の仲間には、僕の手紙の誘いに応じてここへやってきたマインゲンのドイツ婦人がおり、非常な好意で朗読と筆記をやってくれている。残念ながら来週彼女は期限切れだ。眼に関しては僕の

298

今の状態はデューリングの状態と殆ど違わない。去年の夏に突然あまり急激に進んで今まで続いている視力喪失は、僕には訳の分からないことの一つだ。シースが処方してくれたヨード軟膏は効かなかった。——僕は殆ど毎日二、三時間口授筆記して貰った、しかし、

僕の本質の根底に到るまで僕を虐待しているものをこう呼ぶ資格が僕にあるとした場合の僕の「哲学」は、もはや伝達し得ないものだ、少なくとも印刷によつては。時折僕は君及びヤーコプ・ブルクハルトと一緒にひそかな会議をやりたくてたまらなくなる、それは君たちにあれこれのニュースを話すためではなく、むしろどうやって君たちがこの困窮を避けるのかを尋ねるためにだ。ところで時代は果てしなく浅薄だ、そして如何なる時代にも、遙かに価値多く深みのあった時代にも「公衆」の前には出されなかった事柄をあんなに多く公ニ *publice* 既に述べてしまったことを僕は恥ずかしく思うことが実にしばしばだ。つまり、この世紀の「出版と破廉恥の自由」の真中にいると、趣味と本能が駄目になるのだ。それで僕は、孤独の運命にもっと良く精通していたダンテとスピノーザの写真を自分につきつけている。無論、彼等の考え方は、僕の考え方に比べれば、孤独に堪えさせる類のものであった。そして結局は、とにかく何らかの「神」を仲間として持っていた凡ての人たちにとっては、僕が「孤独」として知っているものはまだ全然存在しなかったのだ。僕にとつて今や僕の生は次の望みの中にある、即ち、一切のものが、僕の理解する現状とは違った風であつて欲しいということ、そして僕に誰かが僕の「真理」を信じられないものとしてくれることだ。——

僕の母から僕は、シュマイツナーが今までに払っていないという憂慮の手紙を受けた。訴訟が続くか、或いは競売などが提案されることにでもなれば、情ない。六月が決定された支払期限だった。万事を引き受けていた僕の伯父は病気で重態だ。

どうか、またここへ五〇〇フラン送ってくれ給え。君の素晴らしい奥さんに心からよろしく、変らぬ友情をもつて君の

F・N

① 「悦ばしき知識」の付録「放浪公子の歌」に含められた詩「南方にて」の冒頭。

二三二、ニーチェより

〔葉書、消印はズイルス＝マリニア、八五年七月四日〕
親友よ、手紙の行き違ひの典型的な実例だ、二つの郵便はズイルスから一時間のところで出会つたに違ひない。僕の手紙が君の質問の凡てに答えていると思う。——「健康」については僕は眼のこと以外は何も書かなかつた。満足させる報せは全然出来ない、そして僕はしばしば、永遠に「忍耐せねばならぬこと」に対する忍耐が失せ始める。ヴェネツィアは全体的に僕にとつて苦役だった。結果は、企てた事柄凡てに對する多くの憂鬱と不信だった。この高地では調子は若干良くなっている。病人食、主としてミルク。

ゲルスドルフについては情報なし。

奥さんの回復と「出来るだけ早い」バーゼル脱出を願いつつ、君の古い友

二三三、ニーチェより

〔ズィルス＝マリニア、一八八五年七月〕

わが親友よ、金が着いた、何という面倒をかけたことか！——僕は先週殆どずっと続いた全く悪性の発作から起き上がったばかりのところだ。——僕の様に自分に対してこの様な事柄を要求し——しかもこの様な健康状態であるとは！それでも結局僕はこの十年間に若干のことをやり遂げてきた。

——ケーゼリッツからの一通の手紙が僕を全く動転させている、これは君の助言が必要だからどうしても君にも読んで貰わねばならない。全然手の打ち様がない／或いは僕にまだ手があるだろうか？個人的手段を取れば何でも得られるが「コネクション」と積極的な友人たちがなければ最良の芸術家も負け勝負をやっているのだということ僕には知り過ぎている。まさに彼の作品が稀有であり非凡であることが彼の邪魔をしているのだ！——

四年來ケーゼリッツは外部から拒絶と屈辱だけしか経験してこなかった、ちょっとしたツューリヒのエピソードを除いて。(クルティ博士の新聞は以前に僕の政治的見解の味方をしてくれたことがあるのだが、その同じ新聞が獅子序曲について深い繊細なそして予言の如き響きを持った根本的な事柄を述べているのは妙だ。しかも誰が書いたのかを誰も知っていない！)

結局ケーゼリッツは、春に僕が最上の策と考えたことを行なう、つまりリリースに頼むのだ。しかしそれを行なう彼のやり方は否定的返事のみを強奪するためのものの様に僕には思える！——

僕の「交際女性」は一週間前に去った。僕が彼女に口授筆記して貰ったのは、第五の反時代的考察と呼んでもよさそうなものだ。しかしこれはむしろ、ちょっと僕の気を晴らすためにやったのだ。

僕が僕の書籍群の真中にうずくまっているのを君に見せたい位だ！しかも何たる書籍群だ！実際僕はこの十年間に初めて自分に知識を供給してきたのだ、文献学からは僕は結局、方法を学んだに過ぎない(何故なら恐るべき骨董的がらくた類は、僕がまた取り除くこと、いわば「掃除すること」をせねばならなかったものなのだから)。しかし今は眼がまたもや断固としてこう言っている、知識収集の時は書物に関する限り終わったのだ、と。原理的な諸問題を考え抜くことが、どうしてもエンガディーンにおける僕の高地の夏の内容になっってしまったのだが、その挙句に僕が繰返し到達するのは、僕の内部の「懷疑家」が猛烈極まる攻撃をするにも拘らず、何時も同一の決着ばかりだ。これ等の決着は既に、出来るだけ包まればかされてではあるが僕の「悲劇の誕生」に述べられている、そして僕がその後に学び加えたもの凡てがその中へ食い込んで行ってその一部となっている。

ところでこれがズィルスにおける僕の最後の夏だ。眼がこの点でも命令するのだ、僕は明るさの中ではもう堪えられない。その他凡ての点において僕はこの高地で、周囲の一切のものを自分にとって正に最も不愉快である様な具合に所有している一人の苦行者の如くに生きている。自然を除いてだ、そして効果的な乾燥した空気をも。

君の友たる隠者

N

——君がドレーズデンへ行く前に、君たちはこの夏はどこにいるだろうか？

二三四、オーヴェルベックより

バーゼル、八五年七月二六日

親友よ、君のこの前のお便りに対するこの少し遅い返事を勘弁し
てくれ給え、学期の最後の週は例によって不愉快なほど用事が多
かった、そしてその上に、君の問合せに關しての僕の無策の自認が相
も変らず早々とやってきた。実のところ、僕はヴェネツィアへの逆
戻り以来ケーゼリッツの様子を本当に心配している。君が僕にも読
ませてくれたこの手紙は、この心配をつのらせる多くの点を含んで
いるが、一つの点だけは期待と元氣を取り戻させてくれるもので
あり、それが早く実行されればよいと思う、つまり彼の自己放逐に
終止符を打とうという意図だ。この件が僕を憂慮させもするのは君
のためだ。この件がうまく行くことがどんなに君にとって望ましい
ことであろうかとは思ふ、しかしながら、目下の様な状態に置かれ
てその他に多くの重荷を負いながらも既に驚くほど沢山のことをや
つてきた君にこれ以上何をせよというのだろうか？——何よりも先
ず願わしいのは、ケーゼリッツ自身が彼をその様に苦しめている経
済的依存から遂に解放されるために何かをすることだ、それに苦し
まねばならぬ重大な原因が實際に存在しているものとしてケーゼリ
ッツがその点で一種の自責者^① *Heautontimorumenos* であるとい
うのでなければだ。この点は僕がミュンヒェンで彼の弟を訪ねればもう

303

少しはつきりするかも知れない、この弟の事情も、僕が色々聞いて
いるところでは、残念ながら昨年^②の状態より良くなっているとは殆
ど期待出来ない。僕が秋に、勿論短期間に過ぎないが、ドレーズデ
ンへ行くことをケーゼリッツは知っているし、僕たちの出発前にも
彼に手紙を書く、そしてあそこで何か役に立つ様なら彼の言う通り
にしてやるということは既に伝えてある。——僕たちは、週末より
前ではないと思うが、先ずミュンヒェンへ行く。近々手紙をくれる
時はそのフルステン街一三番三階へ宛ててくれ給え、その後は
僕が一番下の義弟が高校卒業試験を終えたらバイエルン高地のバル
ム湖へ行き、最後になお数日の予定でザクセンへ行く。ウィーデマ
ンの書^③を休暇中の読み物として携えて行く。これがちゃんとしたも
のならば、特に僕たちのケーゼリッツを鼓舞し刺戟するものともな
るのではないかと期待される。この夏学期は、聴講者の数において
夏らしい繁栄がおよそ得られなかったし、しかも彼等の不勉強の開
花ぶりは実に盛んなものであったが、僕はまたもや余りにも多く職
務に關係せねばならなかった、そして次の学期は、新しく設けられ
た教会史研究科で僕の持ち分を引き受けねばならず——これを設け
たことには僕は、君には分かると思うが、責任はない、しかしなが
ら今度も僕は「一緒に捕えられちゃった」のだ——今までより良く
なりそうにもない。

最近僕は、三年ほど前に死んだベルリンの神学教授ファトケの伝
記を読んだ、これは我慢ならぬほど冗慢で拙劣に作られたものだけ
れど、形而上学が学者にとつては生命に關わるほど危険なものだと

304

いうことを僕によく教えてくれた。彼の場合にはヘーゲルのものだったのであって、それに鼓舞されてこの男は若い頃にもう、その認識の豊富さの故に今日でも並ぶものがないと僕に言う人があるほどの旧約聖書信仰の歴史の第一巻を出した。その後には彼はヘーゲルへの信心を失い、それと共に彼の翼をもすっかり失ったが、それ以外は実に恵まれた境遇の中で八〇歳位にまでなった、そして彼の消息を耳にすることは殆どもうなかった、第二巻に到っては全然だ。ところで、他の鳥の翼を元気づけるためには、それこそ自分の翼のために生きなければならぬ、君がやっている様にだ。そして君の前の手紙からも分る様に君には相変らずそれだけの不屈の生命力がある、これが僕を、たとえ如何に多くのものが君を苦しめていても、慰めてくれるのだ。ズイルスもう駄目だということは非常に悲しい、何しろ全体的には、君が身を委ねた如何なる土地の守護神よりもその守護神が一番良いということが実証されている様に思われるからね。未聞の涼しさだけれど素晴らしいこの七月には非常に調子よく過ごしている僕のフラウがくれぐれもよろしくと言っている。君のいつも誠実な

F・オーヴェルベック

- ① テレンティウスの喜劇の題目。
- ② 名はルードルフ。一八六一年生まれ。二二七番で分かる様に、画家であった。
- ③ 出版されたばかりの「認識と存在」。ニーチェも勿論贈られた。

二三五、ニーチェより

ライプツィヒ（一八八五年一〇月）アウエン街四八番三階右側親友よ、ライプツィヒからの挨拶だ！君には意外に思われるだろう。しかしこの秋はもう一度ドイツ行きをやりたくてたまらなくなった（身体のためにも「魂」のためにも今後ここに求めるべきものは何もないのだが、僕の母と妹と一緒にいるのをもう一度見ておくためだ——これが最後になるかも知れないのだ！何故なら一月か二月に新しい「移民たち」が出発するからだ、幸いにして二人だけではなく、尊敬すべき実に立派な人たちが一緒にだ。フェルスター博士には僕はまだ会えずにいる、何故なら彼はウェストファールンにいて、演説しては騎行することを繰返しているからだ、彼の二頭の馬（パラグアイと反ユダヤ主義）に乗ってだ、そして十一月には同じことをザクセンでもやるだろう。その様な使命と結び付いている仕事と興奮との量は僕たちの様な者には全く見当がつかない。僕が嬉しいのは、彼の性格を賞める点では皆が一致していることだ（何故なら、こんな思い掛けない僕の「親族」の大体の評判を友人や敵の口からひそかに確かめることを僕は考えていたのだから）。一般的に反ユダヤ主義者諸君を無条件に信用してはならない理由は、何しろたつぷりとあるのだ。ところで彼等のやっていることは、遠くで感じられるよりずっと人気がある、特にプロイセン貴族全体がこれに熱狂している様だ。——パラグアイ植民の考えを僕は大いに吟味した、そこに僕にも何時か避難所が見付かるかも知れないとの底意がないでもなかった。この見込に関しては絶対的「否」の結論

に達した。僕の氣候的要求が反対するのだ。しかしその他の点ではこのこと全体は大いに道理にかなっている、これはドイツの土地耕作者にとつては素晴らしい土地だ——そしてウェストファーレン人とカポンメルン人は必ずしも幻想的でない期待を抱いて良い気分でそこへ出帆してもよからう。他ならぬ僕の妹と僕の義弟氏がそこに

306

適しているかどうかは別問題だ、そして実を言えば僕は母と共にしはしばひどく心配になることさえある。——僕の母の今後の孤独が僕にとつてのもう一つの心配だ。彼女が少なくとも一年の中の一部を僕と一緒に、例えばヴェネツィアで過ごすということになるかも知れない。僕自身にはそれは大いに有難いことだ、何故なら僕の身体の状態と半盲目に対する思いやり深い看護婦が益々不可欠になつてきたからだ（欄外に^①。君には見当がつくと思うが、母は僕を結婚

させたいと思っている（以前に僕の軍隊時代の長官だったフォン・

ヤーゲマン將軍の娘とだ）。しかし彼女の望みは空しい、僕の心の孤

独化については言わずにおく、この孤独化から僕を抜け出させることは今では如何なる善意を以てしても不可能だろう。僕はこれを運

命として受け取る、そしてさらに、この運命を不幸と考えながら荷なうのではない様にならうと思つてゐる。實際今の僕に欠けている

のは、僕の周囲に適切な間隔を作ってくれる一人の人間だ、僕がこの数年曝されてきて今もまた曝されている不必要な災難を僕に免れさせてくれる一種の式部官だ。毎月、少なくとも一つの大きな愚行 *betise* が僕に対して行なわれねばならない様だ、特に、現代において恐ろしく心の優美さとおつましさが失われている女性諸君によ

つてだ。ところで、何とかして、次第に僕が人々の記憶から失せるといひ、そして僕の孤独がもはや如何なる厚かましいおしやべりのきつかけにもならない様になれない。ズイルス＝マリーアは多分固執されることになるだろう、蔭の多い道が設けられたり僕の部屋が模様替えされたりして僕の眼の諸要求はこの上なく快く容れられた。冬の予定はまだ全然決まっていない。ひよつとするとヴェネツィアへ行くことになるかも知れない、そこはケーゼリッツの出発（ウィーンへ——）の後には独り者の僕にとつて可能となるのだ。シュマイツナーの事柄が前面へ出てきている。彼は二年間に四回約束を守らなかつた——もつと正しく言えば、馬鹿者の僕は四回彼に完全な信頼を与えてきた、しかもあんなに多くの悪い経験の後にだ——君の調子はどうだろうか、古い親友よ

N

月半ばに僕は再びナウムブルクへ行くだろう。金のお願いを僕は今日はまだはつきりさせることが出来ない。

① 括弧内が欄外の文であることに関しては、ボーグッハ「ニーチェのノート瞥見」一八六頁参照。

二三六、ニーチェより

〔葉書、消印はライブツィヒ、八五年一〇月七日〕

親友よ、シュマイツナーの件に関して今入ったばかりの報せ（悪い報せであつて、腹を立てずにいるのは困難だ）によれば、僕が今やこの場合にはもはや一文も期待出来ないということだけは明瞭だ。

307

あんなに確かにそれを当てにすることが許され、そして当てにしていたのにだ（ツァラトウストラ第四部の印刷の支払い（約一〇〇ターラー）、ローレンツとの書籍代の清算、そして最後に今回の北方旅行の全体ノ）。シュマイツナーの支払期限であつたこの一〇月一日にはシュマイツナー出版社全部がケムニッツとライプツィヒにおける編集者で出版者のエルレケへと売却されることも取り決められていたのだ、その契約のコピーが僕の手にある。しかし今聞くとところによれば、そのこともおじやんなのだノ——ウィーデマンの父親がシュマイツナーの弁護士だ。——今僕のために引き出せるだけの金を、どうか、ライプツィヒへ送ってくれ給え。

誠実をもって、君のN

昨日、奥さんによくと書くのを忘れてしまった。

二三七、オーヴェルベックより

バーゼル、八五年一〇月九日

親友よ、何週もの間君の航路を見失っていたが、昨日君からの二通の報せが僕に再びそれを分かせてくれた。そして君の助けがなければ勿論それは分らなかつたろう。君がもうグラウビュンデン^①にはいないということだけは疾うに推察せざるを得なかつたが、それ以上の推察は無理だった、そして僕たちがドレーズデンにいた時やライプツィヒそのものをこの前の土曜に通過した時には僕が会いに行くことは簡単だったのだが、君がそんなに近くにいやうとは到底考え得なかつた。君が再び北方に現れたことは目下の状況下では

308

勿論十分に訳が分かるのだけれどね。君自身がパラグアイを諦めるのを知って嬉しく思う。君の冒険は、いわゆる新しい世界とは違つた世界に属しているのだと僕は思う、そして何れにせよ、今や君にお母さんとの共同生活の見込が生じたことの方がずっと僕を安心させてくれる。君がその種の世話をそんなにも完全に欠いたまま今後どうやって行くのかと僕はずっと以前から自問しているのだ。ところで君はまたシュマイツナーについての悪い報せをくれた。信頼によつてはこの場合もはや何も得られない、他にまだ何か出てくるといいが。それだけに一層嬉しい気持でお報せ出来るのは、僕が月曜に国庫へ出掛けたら即座に君のために今までの五〇〇フランを渡されたことだ。つまり、僕がその様な処置を無難作に期待したのは良い助言があつたからなのだ——カルル・ブルクハルトと会つたハーゲンバッハからだ。勿論この支払いは今後いつでも取消し可能のものだ。（欄外に。無論、将来に關してのことだ。）残念ながら僕はまだハーゲンバッハを通じて受け取るべき五〇〇フランを入手していない、だからその金は直ぐ送るわけには行かない、しかし遅くとも明日は送ることが出来ると思う。ドイツ紙幣で八〇〇マルクだろうと思う。僕がその他にまだ君の金庫の中に保管している七八フランは、送金額が可成りのものであるから目下無しで済ませ得るのではないかと思う。これを残して置けるならば、君の小冊子のために職工銀行に預けておこう、一一月末日には一九、五フラン加わる。しかし君がどうしてもこの金も入用なら、どうか報せてくれ給え。

二ヶ月の休暇の間に僕はすっかり元気になつたし、フラウにとつ

309

でも休暇は非常に良かった。五週間僕たちはバルム湖畔で殆ど何時も戸外にいて動いていた、天候は八月半ば以後は極く平凡だったけれど。一夜僕たちは僕の義妹たちと一緒に物凄い暴風雨の時に木造ヒュッテの不完全極まる保護の下に高い山の上で過ごした。案内人が、遂に襲来した霧の中で道が分からなくなったのだった。しかしこの冒険は尾を引かずに済んだ、僕たちはさらに翌朝七時間の帰りの行軍を、絶えず降りそそぐ雨の中で、次第に猛烈になった水の流れを越えながら行なわなければならなかったのだけれど。あの地方の景色は素晴らしい、しかし僕たちでもその場所自体の位置がもっと高ければいいと思った。ましてやエンガディーン人の君には不足であらう。最後に僕たちは二、三週間ドレーズデンにいた、そこで僕はウィーデマンがケムニッツにいたから会おうと試みたが、またもや空しく終った。彼のお父さんが法廷で君と争うことは彼にとって本当にいやなことだろうと思う。ケーゼリッツから僕は、夏に書いた手紙の返事をまだ受けていない。——ここではその後、元市長で現大学協会長のカルル・フェーリクス・ブルクハルトが死んだ、公には肺カタルのためだが、実際には、そして道徳的には(——)家のひどい(——)破産のためだ。——この時期には通例のこのだが、ほっておいた仕事が多量に面から僕に襲いかかってくる、しかし僕は一年前よりずっと健康でそれに着手している。——同封の、適合自在な手紙をやつと送れる。僕はこれをもう三週間ほど前から持っているのだ。——フラウが君の挨拶に心からお返しの手紙を言ってくれる様にとのこと。

いつも君に友情を捧げつつ

君のオーヴェルベック

- ① エンガディーンを含んでいる州の名。
② 部厚くなくて同封するのに都合の良い手紙という意味であらう。

二三八、オーヴェルベックより

バーゼル、八五年一〇月九日

親友よ、今朝君に書いた手紙で報せた八〇〇マルクを同封して送る、そしてさらに今は晩の挨拶をも。いつも君のものなる

F・オーヴェルベック

両替屋はこの種のドイツ国立銀行紙幣しか持っていないかった、しかしフランクフルト銀行紙幣と絶対に同じ流通能力があると保証した、これに対しては若しそうでなかったら早速異議を申し立ててくれる様お願いする。

二三九、ニーチェより

(一八八五年一〇月一七日)

ライプツィヒ、アウエン街四八番三階右側

親友よ、凡てが無事に僕の手に入った——そして今やってきた君の祝辞も僕の心に！これは、書面に委ねられたものとしては僕が今回受けた唯一一つの祝辞だった。——僕は四一歳の生というこの事実をじっくりと考えてみた。これも一種の成果だ、そして如何なる点でも悲しい成果というわけではないかも知れない、少なくとも、自

分の生の意味を認識する権利を自分に認めることが許されるとすればだ。この認識には疎外、離反が付随している、若しかすると冷却もだ。「凍結感情」の目盛りが今では殆ど僕の専門になっていることを君は十分に認めていると思う。こんなに長いこと「高みに」生きていると、つまり「山の上に」或いはまた被追放者の如くに「野ざらしにされて」生きていると、そういうことになるのだ。暖かさのほんのかすかな刺戟に対しても敏感になる、そして益々敏感になって行く——おお、友情に対してこんなに感謝の氣持になるのだ、わが古い親友よ！

ナウムブルクに二日いた、僕の誕生日の「お祝い」の時にだ。ずっと病氣だった、外部から内部へなのか、内部から外へなのかは全く決定し得ない。どんよりしてむっとする空だった、ひよっとするとナウムブルクは今度が最後だ。

フェルスター博士は僕の性に合わないことはなかった、彼はその態度の中に誠実な高貴な点を持っており、本當に行動向きに出来ている様だ。彼が何と多くの事柄を絶えず片付け、そしてそれが彼には何と容易に行なわれたかが僕を驚かせた。こういう点で僕は違っている。彼の価値評価は、当然のことながら、僕の趣味には余り合っていない、一切が余りにも速く済まされる、——僕たち（君と僕と）の感じ方から言うところの種の人々は性急だ。——タイムズがやっていたフェルスター描写を僕は以前に読んだことがあるが、それを僕は適切と認めざるを得ない。

その間にシュマイツナーの件はまたもどんと進行した——断

じて「前進」とは言えない。この前の月曜には、おごそかに約束されていた解決が午後五時に行なわれる筈だったが、その後も深い沈黙 *stille Nacht* だ。強制競売が見込まれる。彼の出版社全体が六月以来、抵当物として僕によって法的に差し押えられている。競売が行なわれるとすれば、僕の全著作を僕の手に入れる努力がなされねばならない、それ等を後でもっとちゃんとした新しい出版者（多分フアイト商会、即ちライプツィヒのクレードナー氏）に委ねるために、これが今の計画だ。僕は、このことが片付かないうちは、ここから動くことが出来ない。——

昨日僕は、出版元から送られてきたレーの「良心の発生」を受け取った、そしてぎつと眼を通した後に、僕に捧げようと考えられたこの作品の献呈の辞を僕が二年か三年前に謝絶せざるを得ない様にさせた僕の運命に対して感謝した。つまらないものであり、不可解なほど「老衰している」。同時に、偶然の愛らしい皮肉で、サロメ嬢の書（三一五頁を参照せよ）も届いた、これは僕に全く逆の感動を与えた。少女的で感傷的な形式と意志及び知識の力のこもっている内容との何という対照であろう！この中には高みがある、そしてこの偽の少女を引き上げているものが永遠に女性的なるものではないことは確かだが、それでも——永遠に男性的なものではあるかも知れない。——それにしても僕たちのタウテンブルクでの会話を思い出させる部分が実に多い。——

奥さんにどうかよろしく（序でだが、フェルスターは非常に良かった君たちとの会見のことを話した——）僕は彼が君たちには全然

知られていないと思っていたのだが？誠実をもって君の

ライプツィヒ、一八八五年一〇月一七日

①「鳥の如くに自由な者」の意あり。

②「空中に」の意あり。

二四〇、ニーチェより

〔葉書、消印はニース、八五年一月二日〕

親友よ、旅行中であつて「荷物をほだいていない」けれども君の誕生日を祝う者の仲間から外れたくない一人の者の祝いの挨拶を一言だけ。新しい年が僕たちを今度こいよいよまた一緒に集まらせてくれるといい／＼話さなければならぬことが実に沢山ある。書くことは益々困難になり不可能になつて行く。この二ヶ月間に僕は堂堂たるジグザグ航行 *voyage en zigzag* をやつた、そしてその際に土地なり人間なり何か新しいものが僕に見付かるかも知れないというひそかな望みは満たされなかつた。それだけに益々容赦なく頭と健康とが自らの要求を貫徹した。ニースとズイルス＝マリーアとは、これ等にまさるものなく、そして代るものもない様に思われる。ミュンヒエンではテレーズ・イエン街で実に親切な歓迎を受けた、ミュンヒエンそのものは冬の様で太陽がなかつた。——シュマイツナーが支払つた。僕の宛先はニース居留。愛と感謝をもって。

君の二冊のタイヒミュラーはここにある、直ぐに送る。

N

二四一、オーヴェルベックより

バーゼル、八五年一月二十九日

親友よ、誕生日に君から受けた祝辞に對し実に遅いけれど心からのお礼を言うよ、その祝辞と同時に僕を喜ばせたのはシュマイツナーとの君の腹立たしい交渉がやつと目的を達して君のものが手に入つたという報せだつた。全体の結果として君がさらに新しい出版者をも得たのであれば、君は利益をも得たのかも知れないね。クレードナーは僕自身も必要を感じた時には——それを感じることは今は以前より少ないのだが——考えたことがあつた、何故なら彼が自ら僕のところには或る提案をもつて名乗り出てきて無論僕は差し当り応ずるわけには行かなかつたということが以前にあつたからだ。これももう何年も前のことだ。講義ではこの冬の僕の忙しさは普通のものに過ぎないけれど、新しい職務が加わつてきた、つまり神学研究科の再編成によつて僕に教会史部門がふりかかつてきたからだ、同僚と交代でやるのだが差し当つては僕の番なのだ、そして慣れていないことなので随分と忙しく、しかもこの様な事柄の場合の常として、純粹にそのこと自体が要求するより以上に僕の余暇を台無しにするのだ。大学は目下全体的に随分騒がしくて、色々な計画で空気がうなつてゐる。州庁のお偉方は大衆相手の演説の時にさえ大学の新しい建物のことを、決して遠からぬ将来に実現される筈のこととして話している。つい半年前に解剖学と生理学のための堂々たる新しい建物——ヴェッサーリウス記念館と名付けられている——が店開きをした。この前の木曜には、大学が町や州から離れて大学協会を

創設して再構成された五〇周年記念祭が祝われた、朝から何時間もの演説会、それから祝賀宴、学生たちのたいまつ行列、そして教授たちの負担による祝賀の酒宴によって。この様な祝いがパーゼルではどんな風に行なわれるのが常であるかは君が御存知の通りだ、それで僕は、大いに意に反しながらも引き受けた祝賀宴での大学協会に對する乾杯の辭が、この様な折に土地の人によって驅使せられ今回も喧騒を極めたお世辭調子に比して冷淡であつたことを余りにも痛感させられた。とも角も大学協会は榮えている、今度の機会に八〇以上の會員を擁するに到り、そして時代の不況にも拘らず、秋に死んだ協会前会長で元市長のカルル・フェーリクス・ブルクハルトの名に因んで呼ばれることになっている基金の財産は四五〇〇〇フランになった。——神をめぐる戦いから僕が受けた大きな印象については僕は君に書いたと思う。これは僕が今年読んだ中で最も驚くべき書だ。レーの書はまだ僕に届いていない、そして彼の作品を以前に目立たせていた諸特性をも彼が失ってしまったのだという様に君の判断を解釈してよいのかどうか僕には分からない。——僕の誕生日には遂にケーゼリッツからも便りがあつた、彼がウィーンにいるということだけで、それ以上の良いことは残念ながらもまだ何も書かれていない、しかしそのことだけでも彼のヴェネツィア逆戻りの後においては十分に良い。——僕が君の義弟を知っていることは、君が忘れてしまっただけのことだろう。彼を一度僕たちのところに食事に招いたし、別の時にフィシャー家で會つた、どちらも僕の誤りでなければ君がまだここにいた頃だ。^②序での折に彼によりしく伝

えてくれ給え。——今ここでは、君には恐怖であらうと思われる実にどんよりした日々が続いている。ニースの好意的な空を楽しんでくれ給え、僕たち二人は心から君の元氣を願っている。誠実な愛着をもつて、

君の〇

最近ライブツイヒのローレンツからの二通の葉書を以前の習慣によつてジュネーヴ館宛に送つた。今度受けた君の葉書から分かつたのだが、それはどうやら間違つていたらしい。それでも君が受け取つたのなら幸いだ、僕の不注意を勘弁してくれ給え。あれは本の買値の報せだつた。

① アンドレアス・ヴェサーリウス（一五一四—一五六四）はカルル五世とスペインのフィリップ二世との侍医となつた解剖学者。

② ベルンハルト・フェルスターは一八七八年秋にイタリアへの途次、パーゼルに立ち寄つた。同年一〇月二日にニーチェは家族宛にこう書いた、「昨日フェルスター博士がオーヴェルベックのところで歓迎されました」（グロイター版ニーチェ全集Ⅳ 4、五六頁）。

二四二、ニーチェより

（一八八五年十二月）

ニース、サン・フランスワ・ド・ポール街二六番（三階左側）親友よ、君の手紙は僕にとつて心からの喜びだ。御覽の如く僕は直ぐそれに「答える」、実際には全く何も「問われて」いないのに。伝えるべき新しいことが余りなくて幸いだ、新しいことは通例難点を持つている。健康はドイツの空の下でよりも良い、頭はより自由

であり、僕がナウムブルクとライプツィヒで悩んだ持続的不機嫌（——僕はこれを隠そうと最善の努力をした——）はここでは少なくとも「持続的」ではない。その証拠の一つは、僕が再び住居その他の実験をやっていることだ、誠実なスイス人宿には三日しか滞在しなかったが、ちよいちよいそこへは戻る、——もう二冬も上記の実験をやつて絶望した後だけれど、ひよつとしたらという気がある。独立的で僕に適當なところが遂には見付からなければならぬ。しかし僕は、僕がそれを見付けることを益々疑っている。だから僕は、僕のために尽力してくれる人を必要としている。僕の性質が非實際的なこと、半分盲目であること、他方、僕の健康の結果として臆病であり、頼りなく、元氣のないことが、僕を殆ど破滅しかねない状態に堅く締めつけることがしばしばある。——

殆ど七年の孤独、しかもその大部分は、僕に必要な一切のものが欠けていたために全く大同然の生活だった！これを誰も本当に近くで一緒に眺めた者がいないことを天に感謝する（ランツキーを除いてだ、彼は今でもそのことに狂喜している）。そしてそれ等凡てのことに加えて、苦痛な、少なくとも雲におおわれている日々が実に多いのだ、「眼の気晴し」を欠いている者が誰でも陥る絶望的退屈はさて置いてだ！僕の随分の度の悲觀主義と諦觀主義を人々は大目に見なければならなかったことだろうなと僕は思っている、しかし僕自身はそれを「大目に見は」しなかった、むしろ力の限りそれに抵抗した。（その点で僕の爲した最も強力なものとしては、如何なる状況下に僕が僕のツァラトウストラを始め、そして貫いたかが挙げ

317

られる、——僕は最近三年の中の一日をも二度と生きたくない、緊張と対立が余りにも大きかった！）

これは僕たち内々の話だ、古い親友よ！「内々で」言わねばならないことが実に沢山あるのだがなあ！手紙じやどうもね、手紙に對する僕の不信は何とも大きなものになってしまった。——ふと思ひ出したのだが、僕はシュマイツナーのところから出版された君の諸著に関する僕の考えをクレードナーに詳しく話してあつた。僕が考えていたのは、シュマイツナーの出版社が競売された場合に、大いに尊敬すべきクレードナーが君の諸著をも手に入れることだった。残念ながら、と僕は言わざるを得ないが、その競売は実施されるに到らなかった、そして君の諸著も僕のも完全に埋められそして発掘不可能のままあの反ユダヤ主義者の穴の中にある。（これはこのことについての僕の洞察なのだが、シュマイツナー自身もそれを別様には考えていない）。僕の「著作」はもはや存在していない——、こういう判断を下して僕はドイツに別れを告げた、決して捨鉢な気持ちなどではなかった！——むしろ僕が感じていたのは、この忘却（*forgetting*）の中には何と多くのけしがあることか、そして僕が僕の広大なそして危険でなくもない思想を「公衆」の好奇心の外で追求出来ることは何という価値を持つことかということだった。ドイツでは誰一人（僕を良く知っていると思つてゐる場合でも）、何を僕が自分に求めているのかを、或いは僕が何かを求めているのだということを知つてはいない。そしてその上に僕が困難極まる状況下でその相

318

間的余りに人間的の第二版のことで意見が一致していた、これのために僕は一切（清書を除いて）の準備を済ませてあった——一夏全部の作業がその中にこもっているのだ！シュマイツナーは、第一版のまだ余っている部数を廃棄するのに二五〇〇マルクの額を要求することによって妨害した。そのために、僕が理解したところでは、第二版の可能性は永久に沙汰や *missa acta* になっている。シュマイツナー自身は僕の諸著を今は鉛の様に重たく感じている（ライプツィヒの書籍商から確かめたことなのだが、それ等は到る処で「反ユダヤ主義書」に算えられている——、そして今や善良なウィーデマンまでも僕をあのいやらしい虚無主義者で毒舌家のオイゲン・デューリングと一息に一緒にして賞めるといういたずらをやらかしている）。ツアラトウストラは百部とは売れていない（しかも殆どワーグナー派と反ユダヤ主義者にしか!!）。要するに、笑って背を向けるだけの理由があるのだ。一番有難いのは、その他の凡てが綺麗に解決したこと、シュマイツナーが支払ったこと（必ずしも君に報せたほどではないが、それでも五〇〇〇マルク以上）、僕の家族が以前よりももっと僕を愛していること、皆が僕の外見に満足していること、僕の妹が今後は持ち切れないほどの仕事を、僕に何らの災難も生じない方面で持っていること、ニースとズイルス＝マリーアとが発見されていること、そして今は、一つの哲学の完成にとつて不利である筈のない一種の平穏な状態が得られていることだ。そしてわが親友たる君が愛し続けていてくれる

君のN

319

〔欄外に〕金が出たらどうか何時もの様に（出来ればフランス紙幣）単に書留で送ってくれ給え！パーゼルの年金がどうなっているかを知りたいと思う。——レーの書は素晴らしく明晰で透徹しているのだが僕には何も新しいものを与えてくれない、僕がそれを期待していた面においてはだ。——そして古い事物を歴史的に論証するには、彼にはまさに才能と知識の量が欠けている。「神をめぐる戦い」について君はまだ書いてくれなかったよ——奥さんの印象についての一言（彼女は尊敬を払っている）を除いては。僕は君たちの大学の祝祭の類については非常に良く通じている、パーゼル情報を送られてくるので。

①「けし」は阿片の原料。

二四三、オーヴェルベックより

パーゼル、八五年一月二六日

親友よ、同封の金を出来るだけ早く送ってくれとの君の頼みを忘れてはいなかったのだが、国庫が今回は遅れて、クリスマス・イーヴの日に時間かきりに僕たちに指示のみを与え、そして今朝やつと払ってくれたのだ。しかしこのことは、君に聞しても、全く礼儀にかなっていない。僕は、安全のために、一枚の五〇〇フラン紙幣に替えたいと思ったのだが、両替屋は同封のものしか持ち合わせていなかった、君にも結局はこれ等の方が使い良いかも知れない。大いに感謝する君のこの前の手紙では、君が君の宿からとび出したことを示している冒頭の宛先を読んだとたんに少々心配になった、そ

320

して果して君は早速第一枚目で、君がまた実験に没頭していることを報じていた、そしてそのことを耳にすると僕はいつも君が非常に心配になるのだ。どうして君が、特にその種の事柄の場合に、実験を独りでうまくやって行けるだろうか、不運極まる経験をせずに。

君がニースとズィルス＝マリニアを「発見した」と考えていることは大いに愉快だ、間もなく僕に、君が少なくともニースで冬に君をあらゆる実験から免れさせてくれる一人の仲間を見出したということをも報せてくれることが出来るといいが、僕が君に、同時にフラウの名においても、新年の幸を願うとすれば、先ず第一にそのことを考えたい。——僕たちはクリスマスマスを二人で全く静かに過ごした、

321

お互いに本、楽譜、その他多かれ少なかれ必要なものを贈り合った、僕はフラウにゲーテのシュタイン夫人への書簡集、トルストイ伯のアンナ・カレーニナ、ルナンのド・ネミ牧師、リーマンの分節版ベ

ートーヴェン・ソナタ集の一冊を。僕の諸著は全く商売道具だったのだ、そしてこれ等が益々増えるので僕は僕の書齋の中で何処へ置くべきかもう直き分からなくなる。僕の眼は夏まで可成り心配だった、余りにも著しく進んだ近視のために。秋以来は何時も眼鏡をかけている、遠方用と特に机に向うためのとだ、そして従来の僕のやり方をやめる様にと強く警告してくれたミュンヒエンの眼鏡屋に大いに感謝している。本当に近視の進行が差し止まったと思う、そしてとも角も眼の中に休らひを感じている。——クレードナーのところでの君の骨折りに大いに感謝する、僕がはまり込んでいる馬鹿げた反ユダヤ主義者の片隅から抜け出せたら非常に有難かったこ

とは確かだ、ところで僕は僕の著書の世話には公衆に委ねることにする、そしてこれもまた気楽だ。神学者たちの中では、ちびのハルナック『年上の同僚が発している心のこもった愉快な言い方である。専門仲間である両者の疎隔は九十年後である。四三三頁参照』^①が相

変わらず僕の唯一の読者だ、彼がたった今、彼の教義史の第一巻と実に愛らしい添え状とによって僕に実証している様に。僕は彼の感受性に対して過度という点だけは非難せねばならない、即ち彼の感受性は余りにも多くのもの、そして色々のものに広がって行つて彼の考えの明瞭なそして本当に確かな表現を彼に許さないのだ。——と

ころでお待ちかねのものを長く待たせるわけには行かないからこの手紙を直ぐ出さなければならぬ、これが好気分の君に着くといひ、そして年の終りに当って、君の新年への移行を楽にしてくれるものが凡て君の周りに揃っているといひ。

いつも君に誠実な

F・オーヴェルベック

二、三日前の新聞の報道によれば、ローデがライプツィヒへ招聘されている。このことは暫く前から予期されていることであり多分本当だろう、そして彼には何れにせよ望み通りのことであろう。

① これは何も参考にならない。一八九七年以後の両者の疎隔に関してはベルヌリ書第二卷一三九頁以下を参照のこと。

二四四、エーチェより

ニース、サン・フランスワ・ド・ポール街二六番三階

(一八八六年一月九日)

親友よ、述べるべきことが色々あるのだがな、「眼がもつと良
く」さえあれば。——新年に当たつての友人としての君の親切な言葉

に本当に感謝する、同様に非常に有難かつたのは五枚の百フラン紙
幣だ（——おかげで僕は、僕が憎んでおり何時も僕を病気にする「両
替屋行き」をせずに済んだ）。今年は克服せねばならないことが多い、
先ず、今後の数ヶ月であつて、これは僕の家族にとつても僕に劣ら
ず辛い。僕の母は殆ど絶望している。——昨日母が僕にローデの件

に関する最後の決定 *Definitivum* を報せてよこした、母はそのこ
とに色々な期待を結び付けている。事実、殆ど僕の故郷と言えるラ
イプツィヒは今や、以前の僕の良い知人や仲間たち皆の寄合所の様
なものとして、僕には二倍の価値を持つ様になった。母はその報せ
をハインツェ夫妻から貰つたのだ、この夫妻は昨秋僕に対して非常
にねんごろだった、そしてまた復活祭休みにはこのニースに僕を訪

323

ねる積りでいる。同じことをヴァロンブローサのランツキー氏が約
束した（残念ながら「精神の人」ではないが驚くほど高貴で繊細な
人物であるランツキーの様な人間が——僕にぶつかってきたことを
僕は本当に感謝せねばならない。やがて彼は僕の「実践的理性」の
様なものになるだろう、家計管理者、健康助言者等々として）。ケー
ゼリッツ氏の手紙は彼の状況を全く明らかにしているから君に知つ
て貰うために同封するが——これによって君は、他にも幾人かのニ

ース訪問客がありそうだということが分かるだろう。ウィーデマン
氏が僕の母に、二、三年僕の近くに暮らすことが出来る様にとの願
いを述べた。実を言うと、僕は考え込んでしまった——しかしこの
点では安心していられる理由があるかも知れないということがケー
ゼリッツの手紙から推測出来るよう。ケーゼリッツが彼のコルシカ風
の歌劇（これのための構想を僕は昨夏彼に送つた——彼はそれに有
頂天になつた）にここで着手することが僕の望みだ。僕はそれを可
能ならしめるためにひそかにあれこれのことをやっている。最後
に僕は、僕に感動的なほど好意を持っていてくれる僕の三人の婦
人、フィン母娘とマンスローフが同じくここへやってくるという
期待を持ち続けている。勝手にお互いを捨てることは決して出来な
いものだ、一旦お互いを見出したとなるとね。つまり、通例の様に
自分に強制を加える必要なしに交わることが出来るこれ等の高貴で
繊細な婦人たちと会うことは、余りにも稀なのだ。今彼女たちは英
国にいます。——僕は僕の「実験」のことを書いたね、ところで僕が
それを敢行して、しかも昨冬の拷問同然の苦しみ、その影響でその
後の半年間殆ど病氣になつた苦しみに再びしびりつけられなかつたこ
とは、天に感謝しなければならぬ。このバーゼルの出身の人たち
全部がその様な際に僕を助けてくれるのだ、バーゼルの流儀である誠実
な丁寧なやり方で。天候は筆紙に尽しがたいほど素晴らしい、来る週
も来る週も。空は朝から晩まで輝くほど澄んでいる。
僕がビゼーの若い頃の作を聞いたということを奥さんにお伝えあ
れ、オーケストラ組曲ローマだ（ビゼー自身は哀れにもこれを聞く

324

ことが出来なかった！）魅惑的だ——素朴で同時に洗練されている、フランス音楽のこの最後の巨匠の凡ての作がそうである様に。——

心から、君の友

N

シュマイツナーの金の最初の使い道として、僕の父の墓を大きな大理石板でおおわせた。（これは母の希望では将来彼女の墓でもあるだろう。）

二四五、オーヴェルベックより

バーゼル、八六年三月八日

親友よ、君から便りがなくなつてから随分長い様な気がする。

君がその後どうしていたかを遂にまた知りたいと思う。何も重大なことが君を苦しめはしなかったであろうと期待してはいるが、イタリアも免れ得なかったこのきびしい冬がまたも君を悩ませているのではなからうかと心配だ。少なくともここでは、僕たちがもっとひどく凍えた年が二、三年はあるにしても、それでもこの冬は著しく強情だ、そして僕たちは目下また雪の中だ、この時期には当地では珍しいことなのだ。実際僕は最近風邪をひいた、バーゼルでは殆どなかったことだ、そしてすっかりはまだ癒っていない。しかし他の色々な厄介事は今冬は例年よりずっとうまく行った、そしてフラウも非常に好調に切り抜けた。復活祭が突飛な時期に当たっているおかげで随分長い休暇が持てることになる。何故ならバーゼルの謝肉祭のために今週の末にはもう今学期を終えねばならないからだ、そ

325

の後にちょっと残っているけれど学生たちが出てこないだろうからね。僕は、僕が公刊の意図を再び抱いている「教父学研究」の少なくとも第一冊を仕上げ得ないものかどうか、やってみる積りだ。三冊の計画が出来ている。——君はもう僕たちの新しい歴史学教授席

について何か耳にしたかい？最近少なくとも新聞には最良のアカデミックな宣伝スタイルで、イエーナのゲルツァーが「ヤーコプ・ブルクハルトの代りとしての名誉ある招聘を拒否」したという記事が載った。このことはそれなりに正しいから、僕たちの大学の運勢が上昇しつつあるとは必ずしも言えない。それでもブルクハルトの完全な代りというわけではないのだ、彼は今後文化史の講義に専念するために自分の講義の一部だけをやるのだ。残念だがバウムガルトナーは近年はこれに適合する様にはやってこなかったから、この場合真面目に考慮はされない。彼はすっかりアルメニア人になってしまっており、彼が今僕に伝えてきたところによれば今週アルメニア研究者として再びウェネツィアへ旅行し、それからパリへ行く。ベルリンに期待をかけ得るであろうしそこではモムゼンだけしか決定的対抗者を持たない筈のゲルツァーが拒否したからには、目下こちらは今後に関して可成り困っているらしい。その上、ブルクハルトが彼の大学での活動の最後の燃えさしを以てしても歴史的関心を持つ学生たちを殆ど吸収してしまふであろう、そして後任者は、たとえそれが誰であろうとも、申し分のない立場を占めるわけには行かないだろう。彼を取り換えることを現在のバーゼルが本気に考えるという様なことは有り得ないからね。秋以来僕たちはまた一人の

326

新しい生理化学教授を迎えている、この人の就任演説「生命主義と機械主義」を近く送ってあげよう。この著者はショーペンハウアーの信奉者であり、恐らくその形而上学的な下心の故に今日の自然科学者の間に不満を惹き起こすだろう。勿論現在の形においてはその下心は未来への指針に留まっており、この指針がどの位役立つものかは僕には分らない。しかしブンゲ——今のロシアの大蔵大臣の甥——は独特な人物であり彼の講演は君に面白いかも知れない。——君の住所はまだ元のままだと思うが、君がそれをはっきり報せてくれないうちは月末に君の金を送らないことにする。ところで今度の夏はどうなるかね、君のお母さんとの共同計画の幾分かは実行されるだろうか、妹さんの移住が遂に行なわれたのだから。——フラウが心からよろしくとのこと。直ぐにまた君から良い便りがあることを期待している。君の誠実な

F・オーヴェルベック

二四六、ニーチェより

〔一八八六年春〕ニース（フランス）

サン・フランスワ・ド・ポール街二六番三階、木曜

親友よ、君が僕に手紙を書いた時と殆ど同時に僕の想いがバーゼルの君のところにあつたことを、一昨日君に送った赤いノートが君に示していると思う。——こんな奇妙なコト *curiosa* をお互いに、

327

一緒に大いに笑う（怒りさえすることが出来たら、どんなにいいだろうな！）噫、馬鹿げた健康だ、自分の友人たちから離れていなければなら

なければならないなんて！君自身の健康についての（最近の二通の手紙での）、また君の眼についての報せは、君が實際何と勇敢にそのバーゼルで切り抜けていることかと僕を驚嘆させる。しかし勿論君は奥さんのおかげで僕よりも百倍も恵まれているのだ。君たちは一緒に一つの巢を持つている——ところが僕はどうか転がっても何処へ行っても、持っているのは精々一つの洞穴だ。この人たちは僕にこう言う、僕がこの冬中、色々な苦難にも拘らず何時も「素晴らしい機械」だった、と。僕自身は僕にこう言う、僕はこの冬中、非常ニ哀レニ *profondément triste*、昼も夜も僕の諸問題に悩まされながら、實際洞穴的というよりも地獄的に生きてきた、と——そして僕は人々との時折の交際を祝祭の如くに、「僕」からの救済の如くに感ずるのだ、と。快活に対する大きな誤解だ！愉快な皮相性によって重苦しい生活の中で何時も自身を「表面に」^①保ってきたあの雄々しいマルヴィータがこう書いてきた時には僕は痛烈な満足を感じた、つまり彼女には僕のツアラトゥストラから既に、僕がこの基盤の上に打ち建てる「晴れやかな神殿が手招きしている」のが見えるというのだ。ところでこれは全く笑い死にするほどのお笑い草だ。そして僕は、僕がどんな「神殿」の建築をやっているのかを見物も観察もされないことに益々満足する。——

気晴しだ、古い親友よ、気晴しのみを僕は今もまた必要としている。しかしこれは益々得られにくい。——ケーゼリッツの気持よい軽快な音楽はそれに属する、何と僕は僕の生涯のこの幸運な掘り出し物に感謝していることか！（しかしどうして君は、僕が君へのこ

328

の前の手紙に同封したケーゼリッツの手紙について何も述べてくれなかったのだろうか？行方不明になったのでなければいいが？僕はこの前の金に着いた直後に手紙を出したのだ。その後君から何も聞かなかった。哀れな彼はウィーンにもドレスデンにも失敗した。カルスルーエのモットルに彼のために働きかけてみてくれる様にと彼は僕に頼んできた。モットルは、僕が個人的には知らない人だがその後僕に実に愛想のいい手紙をくれた、つまり彼は僕の推薦（「愚生が熱烈に崇拜申し上げている方の御推薦」）に非常な価値を置くとのことだった。言葉だけでなければいいのだが。——君の著作計画について君が書いてくれたことは僕を本当に喜ばせる。僕は君のものを読むのが実に好きなのだ、君のものから学ぶ事柄を度外視してさえも。君は君の諸思想を実に綺麗により合わせる、狡猾にと言いたい位だ、君はニュアンスの人間だからね。日増しに粗野になって行く時代の中で君がその様であることに天の祝福あれ。——

その後、大学の勤めに再びつく様にと僕を刺戟する努力が行なわれた。^②僕にどうしても文化史講義をさせようというのだ。——おかしなことだ／氣晴しの問題としてだけ見れば、この考えは全く良く分かるものでさえある。しかしそこには誤算がある。

どうか、出来るだけ直ぐに、送れるだけの金をここへ送ってくれ給え（半分フランス、半分イタリア、これが可能であり君に面倒でない限りで）。僕は四月一三日までここにいる。僕の眼がそれ以上の滞在を許さない。その後は多分ウェネツィアだ、路次の暗さがあるからね。それからエンガディーンだ。秋には哀れな老母を少々慰め

329

てやらねばならない。

クレードナー氏は「曙光の第二巻の出版を引き受ける」用意がある、彼は手紙で僕に、彼が「僕の崇拜者の一人に算えられること」を望んでいる旨を報せてよこした。イスラエル民族の中にこの様な信仰を僕はまだ見出したことがない。^③しかしながら——

噫、言わねばならぬこと相談せねばならぬことが何と沢山あるのだろう、親友よ／奥さんとその御家族とに切によろしく。今年はミユンヒエンへも行くと思う。——誠実をもって、

君の友N

（大いに仕事中、ところで心配するなかれ、「曙光」第二巻なるものは生まれないだろう。——）

① 「上機嫌に」の意味あり。

② ニーチェは八六年一月初めに母と妹（パラグアイ移住直前）とに宛てた返事においてその様な企てを拒否し、「もう少し時宜に適ったことにあなたの方の眼を向けてくれるべきでしょう」と述べている。

③ ファイト商会はユダヤ系である。

二四七、オーヴェルベックより

バーゼル、八六年三月二九日

親友よ、全く思い掛けない急ぎ方だが、家族のことでプファルツへ旅行せねばならなくなっているの、今受け取った額を、入手出来た限りのイタリア紙幣で、同封して送る、思う様な手紙を添えることも出来ずにだ。しかし君自身が金を早急に送って欲しい様だから、僕が戻るまで延ばさないことにしたのだ。最近ケーゼリッツの

手紙について何も伝えなかったのを勘弁してくれ給え、今日の郵便を重たくし過ぎないためにこの次の時に送り返すでしょう。ブンゲの講演を最近君に送った、現代ドイツ文学の悲しい動向を知るようにブライプトロイの文学革命を近々送る、今はひとに貸してある。君の今度の手紙は実に暗かったけれど、それでも君の元気の証拠として僕には嬉しい生のしるしだった。

誠実をもって常に君のものなる

F・オーヴェルベック

二四八、ニーチェより

(一八八六年四月、ニースより) 土曜

親友よ、ほんの二、三言だ。眼がそれを要求する。手紙と金と二冊の本を本当に有難う。次の火曜にヴェネツィアへ出発、宛先は単に局留。ケーゼリッツの巢に落着く可能性はある。ハインツェ夫妻がきている、気晴しになる、これが僕には非常に必要だ。冬の宿題はちゃんと出来上った、清書を自分の手でやり、細紐でそれをしばり、他ノ書類ト一緒 *in order* しまい込んだ。こんなものは誰も印刷してくれない、クレードナーは勿論だ。そして去年の贅沢を繰り返すわけには行かない(自費出版のことさ)。結局、万事急ぐには及ばない。——モットルは拒否した、大いに理由を挙げてだ、ワーグナーのための原理闘争その他。——ケーゼリッツ自身が彼の歌劇台本「マリアンナ」(これが例の「コルシカ」を主題にしたものだ)の試作を送ったのだ。ローデが便りをよこした、重い気分のものだ。——

330

実に良かったのは外洋からの、ヴェルデ岬諸島の付近からの手紙だった、僕の妹からのだ。無事な航海、全く船酔いせず、そして素晴らしい人たち。ドイセンの姉妹の一人も企てに加わっている。この或る工場が製品をパラグアイへ持ち込むために僕の紹介を求めている、滑稽だ。フランス文学における今年の大ヒット *le grand succès* はポール・ブルジェの恋ノ罪 *un crime d'amour* だ。悲観主義の最も精神的な二つの流れ、即ちショーペンハウアーの悲観主義(「同情の宗教」を持つ)とスタンダールの悲観主義(ナイフの様に鋭くそして残酷な心理学を持つ)とが初めて一緒になっている。この小説について幾つかの講演が行なわれているが、これは結局のところまたしても「室内樂的著作」であり大衆のためのものではないとされている。ドイツ側ではこれを、僕の聞いたところでは「腐敗作品」と言っている。——

奥さんにくれぐれもよろしく。

君の友 N

覚書。ハインツェは僕に、ハルナツクの教義史から受けた大きな印象を物語った。——或る書を、他ならぬ君に推薦することを許し給え、ドイツでは知らん顔をしたがっている書だけれど、宗教についての僕の考え方を大いに含んでいると共に多くの暗示的事実を含んでいる、即ちユーリウス・リッペルト著、クリスト教、民間の信仰、民間の習俗(ベルリンのホーフマン社、一八八二年)。

① キューバの東北方、バハマ諸島の一部。

331

二四九、ニーチェより

〔葉書、消印はニース、八六年四月二五日〕

親友よ、相変らずニースだ、突然氣候がきびしくなり冬の様になつて僕はここで待たねばならなくなったのだ、ヴェネツィアの健康状態に関する悪い報せも勘定に入れてだ。長くこんなことはなかつたほどに僕は氣晴しを必要としている。それを僕に与え得る人間が僕には欠けている。昼も夜も痛む眼が読み書きを禁ずる。僕が読んだ最後のものはフックス博士の書だった（「ノート」——森トイウ語ハ輝カズトイウ語カラ出テイル^① *lucus a non lucendo*——）、「氣が狂うほど」面白くて巧みなものだ、基本的な点の凡てに僕は同意しないけれど。彼には礼状を出した。ローデが便りをよこした、テュービンゲンを去ることで大いに動揺しながらだ。彼はこの五月にライプツィヒで僕と会いたいと言っている、僕の母も同様だ。僕たちは妹の最近の便りでまた心配になっている、妹は暑い氣候にうまく堪えられないらしい。外洋の真中、ヴェルデ岬諸島付近からの妹の最初の手紙は朗らかだった、素晴らしい航海そして仲間。ドイセンの姉妹の一人も行こうとしている。この或る工場がバラグアイへの輸入品のことで僕の世話を求めてきた、このことは僕には実ニ滑稽 *très ridicule* に思われた。——何と悪い天気ノ——

君の友

N

① 矛盾または不可信的なものの説明（岩波書店刊のギリシャ・ラテン引用語辞典による）。フックスの「ノート」の副題であらう。

二五〇、オーヴェルベックより

バーゼル、八六年四月二九日

親友よ、君の今度の葉書を読むと手紙がまだニースの君に届くかどうか全く疑わしくなる、そして僕にはそもそも今後の君の意図が不明瞭だ、何故なら君が五月にライプツィヒへ行くという暗示をこの葉書の中に見るべきかどうか分らないから。しかし残念ながら余りにもはつきりとその中に見られるのは、君の氣分が再び実に憂鬱であり、君が君のために作った生活がその高尚な目的にも拘らず再び君の上に重くのしかかっているというのが君の現在の実状だということだ。それで僕は、うまく届く様にと願いながら、君にまた友情の呼び掛けを試みる、君がニースを去った場合には手紙に対する配慮をしてあるだろうと考えて。また僕は君にあれこれ話すことがあるのだが、またもその様なことのための時間が全く不足だ。何故なら今日講義が再び始まったので。

とうとう終った休暇は、勿論僕が計画し希望したのとは全く違つた風に過ぎ去つた。僕が大急ぎで君に前回手紙を書き金を送つた一ヶ月前の今日、僕たちは何の心の準備もなしに僕の義父の突然な死亡の通知を受けたのだった。實際僕自身は義父に生前には全然会つたことがないのだ、そして僕のフラウとしてもこの死によつて一つの希望がくずれたに過ぎず、本来的には依然存在している一つのきずなが切れたわけではなかったが、それは如何なる意味においても彼女の氣休めには全然ならなかった。僕は直ぐに、君に手紙書いた数時間後に、ハールト河畔のノイシュタット^①へ発ち、そこで僕の

三人の義兄弟と落ち合つてその場で初めて、義父の死が自殺であり、痛風が脳へ上るのを味わわねばならないという不安やその他の憂鬱のために自ら求めたものであったことを知った。しかし僕は彼の形がまだ全然變つていないうちに彼に会つた、何故なら彼は綿密な熟考と準備をして、部分的に彼を不具にしていた病氣にも拘らず非常な力を使って心臓の真中を撃ち抜いていたからだ。この事件とそれによつて生じたあれこれのこのために僕のこの休みの計画は完全に駄目になった。ノイシュタットにいるうちにもう一つの別の全く予期しなかつた悲しい報せがここから僕に届いた。あのウィルヘルム・フィシャーももういないのだ。彼は確かに新年になつてからはあちこちで疲労を訴えてはいたが、彼の死の数日前までは、肺炎を患つていた彼の夫人に対してしか本氣の心配は持たれていなかった。しかしその病氣が彼自身に移つたらしいのだ、そして聞くところによれば、彼の場合には驚くべき激しさと早さで進行して彼を僅か五六日の病床の後に奪い去つたのだ。僕は数週間前から彼に会つていなかったし、彼の葬式に出ることさえ出来なかつた。古いバーゼルが、氣遣わしいほどに大学から消えて行く。フィシャー夫人は二、三日前から癒り始めている。——悲しいことばかりのこれ等の報せに、さらに、一つの茶番狂言を加えよう、これも僕たちの大学で起こつたばかりのことだ（————）。

フックスは僕から見ると現在のドイツ文筆界の一つの事件だ。彼の書き方は才気をひけらかし過ぎていると言えるほどだけれど、他の人たちも彼のようにやればドイツはもっと愉快なことになるのだが

な。彼の根本見解に対する君の疑念を知りたいと思う。僕は韻律論を読んでる最中であつてこの難しい問題には殆ど熱意を感じ得ずにいるのだが、彼はこれについては特に君の関心を期待しているのではなからうか。一月五日のケーゼリッツの手紙を僕はまだ留めて置く、今回の手紙が着くかどうか不確実だからね。モットルの回答は僕にはよく理解出来ないし、非常に残念だ。君の妹さんについての君の心配がまた和らげられていると思う。フラウがよろしくと言っている、そして僕の誠実は変らない。

① プファルツ州の都市。

F・オーヴェルベック

二五一、ニーチェより

〔葉書、消印はウェネツィア、八六年五月一日〕

昨晚ヴェネツィアに着いた、決心のつかない辛い二、三週を過ごした後にだ。親友よ、君への葉書もその証拠だった。——出版者との僕の交渉は今までのところ全部失敗した、興味の無いことはない事情の下で。最後の試みをハインツェがやってくれるだろう、——しかしモットルの拒否の場合と同様の事情があるのだ。つまり出版者諸君は皆やりたいことは山々なのだが、許されないのだ。（良心として働く世論——）僕は飛び去つた歌鳥の巢にいる。宛先はサン・カンチアーノ新小路五二五六。

二五二、オーヴェルベックより

〔葉書、バーゼル、一八八六年五月三日〕

親友よ、僕はこの前の木曜にニースの君へ手紙を書き先週の色々な出来事を報せた。その手紙が紛失したりすれば情ないことだ、しかし君に転送されたことと思っている。君がヴェネツィアで寒さに悩んでいなければ幸いだ、ここではまたぶり返して、夜は氷が張った。君が出版者たちとの交渉に関して述べている事柄は僕を驚かせた。クレードナーが君のために何でもする気であるのだと僕は思っていた、そしてそれを用いるかどうか君の問題であるに過ぎないのだという風に君の言を解していたのだ。いつも君のものなる

F・O

二五三、ニーチェより

ライプツィヒ、一八八六年六月二〇日

親友よ、ライプツィヒから二、三言だ、ヴェネツィアの僕に着いた君の手紙への返礼としては遅くなったが。僕があのコレラの巣を逃げ出したことは、その数々のきっかけが如何に不快なものであったにせよ、幸いなことだった。話さねばならぬことは沢山あるのだが、書くとなると？駄目だ！眼が余りにも悪い状態にあるのだ。僕が丁度良い時に知ったところによれば、シュマイツナーは僕にひどい悪戯をしようと考えていたのだ、つまり僕の全著作をザクセン書籍業界の最も汚なくて不快な人物の一人に売ることをだ（この人物は、わいせつ本を扱ったために何回も罰せられており、社会民主主

336

義者でもあり、金で動く点では定評があり、その他。それに介入しようとして僕が試みた結果、少なくともそのことは若干延期され保留された。或るライプツィヒの出版者（あの全く信用のおけない気まぐれなクレードナーではない）が今シュマイツナーと僕の著作の（即ち残品の）買い取りについて交渉している——しかし恥知らずなシュマイツナー（彼は僕の窮状を知っていてそれを自分のためにどこまでも利用する）は一二〇〇マルクという恥知らずな代金を要求している。——

新しい作のための新しい出版者を見付けることは出来なかった。この件における多くの辛い経験のために僕は諦めに到達した。結局、殆ど半年が、求め待ち幻滅することに費やされた。僕の著作は「未来音楽」だと僕はライプツィヒで言われた、この言葉を僕は銘記 *ad notam* した。——

次に、ケーゼリッツ氏のために何かをすることが必要になったのだ、彼自身が自作のために骨を折る様になってから一切が立往生したままだったからだ。このライプツィヒで僕は少なくとも一つのことを達成した——ゲヴァントハウスでのケーゼリッツの最近作（七重奏曲）の私演だ、ゲヴァントハウス・オーケストラの最高メンバーである優れた芸術家たちのみによってだ。その成果は愉快なものではなかったが教訓的だった——曲の音色が良くなかった、余りにも猛烈過ぎた。今こそケーゼリッツは管絃楽作製に関して聞き且つ学ぶために本来的音楽都市に住む決心をどうしてもせねばならぬ時だと思ふ。歌劇に関しては僕は今ニキッシュと交渉中だ（余り期待

337

を持たずに)。ケーゼリッツはアンナベルクで作ったコルシカ風の歌劇(「マリアンナ」という)の完成歌詞を持ってきた。しかし僕はこれを賞めることが出来なかった、彼がこの課題に取り掛かった勇氣は大いに認められるべきだけれど。一年後には彼はもつとうまくやるだろう。――

ウィーデマン氏が僕を訪ねてここへ来た。これは有能で尊重すべき繊細な人物だ、彼の哲学は今のところまだ全く初心者の思われるが。しかしこんな風に始めることは、馬鹿にならないことだ。――

ローデときては、僕が会った折の彼は実におかしなジレンマの中であって、テュービンゲンを去った愚かさのためにわれを忘れるほど腹を立てており、ライプツィヒにはひどく反対していた。だからハイデルベルクへ招いて貰おうとの彼の決心(この招きはその後、正式に *formaliter* 行なわれた)は結局は合理的だった、至極合理的な誤り *faute de plus raisonnable*。これは内緒だよ、僕はそのことの最後の決定が今を出ていると思っているけれど(ザクセンの大臣の回答)。――バイエルンの悲劇は僕を深く感動させた、僕はそれの前提について少々知り過ぎていたのだ。――

ミュンヒェンでは君の親類宅で素晴らしい数時間を過ごした。この夏は多分ズイルス＝マリニアだ。近くこの点については葉書を出す。昔ながらの愛をもって、君の

ニーチェ

① 狂気のため退位させられたバイエルンの国王ルートヴィヒ二世の、六月一日の悲劇的な死。

二五四、ニーチェより

〔葉書、消印はロルシャッハ、八六年六月二八日〕
親友よ、明後日ズイルス＝マリニアに着く予定。昔ながらの好意をもってそこへ金を送ってくれ給え、従来の形式で。

変らぬ誠実を持っている

ロルシャッハ、月曜午後。

君の F・ニーチェ

二五五、ニーチェより

〔ズイルス＝マリニア、

一八八六年夏、ドイツから帰った後〕

親友よ、僕も今年は非常に君と再会しなかったのだ、しかし僕は、それが駄目なことをちゃんと知っている。夏中テューリンゲンの森で、秋はミュンヒェンで過ごそうとの僕の意向は僕の健康の不可抗力 *force majeure* (或いは無力 *mineure*) のために挫折だ。現在のドイツに暮らすことは僕には全く有害だ、そのことは僕には毒であって麻痺的作用を及ぼす。そして僕の間軽蔑はあそこに暮らすたびに、危険なほどの割合で増大する。だから僕は、君の住居変更計画にはつきりと現われている様な、「外に」及び「ワキニ a parte」に対する君の好意には徹底的に同意する。確かに羨まれるべきものではないけれど少なくとも悲しまれるべきものでもない君のバーゼルにおける立場は、君が他所では容易に二度と見出し得ない様な或る慎重な繊細な要素を持っているのだ。その土地が僕には気候的に

駄目であることが残念だ、何故なら君とブルクハルトほどに僕が今の僕の諸問題を話し合いたいと思う人はいないからだ。また僕は実際バーゼルの人たちに好感を持っている、そしてバーゼルの人に会うと僕は何時でも嬉しいのだ（最近もそういうことがあった、そしてその都度僕が驚くのは、そこから来る人たちの凡てが何とブルクハルトの精神と趣味を注入されているかということだ、勿論あれやこれやを前提としてだが）。しかし結局僕は神に（もつと正確に言えば僕の病気に、そして非常に多くの部分を君にだ、親友よ！）僕がもはやそこに暮らさずに済むことを感謝する。僕が文献学者で大学教授師だった時にやっていた様に、間違った環境の中に生きて自分の生涯の課題を避けることは、僕を肉体的に必ず破滅させる。そして僕の道の上での前進の一步一步は僕を今まで最も肉体的な意味での健康にも近づけてくれた。だからドイツへの旅行は今まで何時も僕の力の逆戻りであり弱体化であった。残念なのはその様な旅行があれこれの理由から何時も必要だったことだ。他方において、僕は今度の旅行（その悪い影響を僕は今までまだ克服していない）には満足している、何故なら幾多の事柄がそれによって片付いたわけではないにせよはつきりしたからだ（そして多分、この様な旅行を今後は益益減らしてもよいと思われるからだ——）。僕の母は、僕が大いに安心したことには、自分の小綺麗な巣の中で今までより明るく、活動的で、自信に満ちていた。僕たちはちよつとしたランデヴーの取り決めをする積りだ、もしかするとスイスでだ、ナウムブルクに對しては残念ながらバーゼルに對するのと同じ異論があてはまるから

340

ね——そこは幼い頃から僕には有害なのだ。（序でだが、僕の将来の場所は恐らく、春と夏はゲツシエネン^①になるだろう。）

フリッチは今までのところまだシュマイツナーと了解に達していないけれど、それでもひよつとするとうまく行くかも知れない、何故ならフリッチはワグナー全部と同様に「ニーチェ全部」を自分の出版物の中に所有することを大いに重要視しているらしいからね。この隣人関係は僕にとつても本当に快い。何故なら、一切をひっくりめれば、リヒャルト・ワグナーは、僕の重要性を予感した従来唯一の人物、少なくとも最初の人物であつたからだ。（それについては例えばローデも、悲しいかな、ほんの僅かな観念さえ持っていない様だ。僕に對する義務感と言わずもがなだ。）大学のあの空気の中では最良の人たちも変質するのだ。僕は絶えず背景及び最終審として、ローデの様な人物の場合にさえ、一種の呪わしい全体的鈍磨と自身の問題への信念の完全な欠如とを感じている。或る人間（僕の様な）が昼モ夜モ沈思シナガラ *diu nocturne incubando* かく若い頃から色々な問題の中で生き、そしてその中にのみ自分の苦悩と幸福を持っていること、このことに対して共感を持つ者があるだろうかノ R・ワグナーは上述の如くその共感を持っていた、それだからトリープシエンは僕にとってあの様な気晴しであつたのだ、ところが今の僕にはもう、僕の気晴しに役立つ様な場所もなければ人間もない。——ありとあらゆる出版者との僕の交渉は僕に結局唯一の方策を示してくれた、そして僕は今やそれを行なう。僕の費用で出版『善悪の彼岸を』させる試みをするのだ。三百部売れるとす

341

れば僕は出費を取り戻す、そしてこの実験をもしかすると繰り返せるかも知れない。C・G・ナウマン商會が、大いに尊敬すべきその名前をこのことに貸してくれる。これは内緒だよ。シュマイツナーの怠慢はひどいものだった。十年来、書籍販売店に一部も配分されず、新聞雑誌編集者への献本もなかった、ライプツィヒには一軒の委託販売店さえない、広告は何れも無、——要するに「人間的、余りに人間的なもの」以後の僕の著作は「逸話 anecdota」なのだ。「ツアラトウストラ」は売れたのはどれも六〇乃至七〇部だ、その他その他。シュマイツナーの弁解は何時も、十年このかた僕の友人の誰一人として僕の味方をする勇氣をもちや持っていないということだ。彼は僕の著作に対して一二五〇〇マルクを要求している。君の著作を彼はドレーズデンで売ろうとしている。これはフリッチの話。——

——金は無事に着いた。

誠実をもって、君の友

N

〔欄外に〕ケーゼリッツが秋の間ニースへ移る可能性が大いにあると今報せてきた。同じことを二、三週前にランツキー氏が言ってきた。九月半ばまで僕はここにいて、ここでは旧知の人たちにこと欠かない。マンスロー嬢、フィン母娘、ヘーレン・ツインメルン嬢等々。ミュンヒェンからはポートマー伯爵家の二婦人。どうかシュマイツナーに、僕が彼のフリッチとの交渉を知っていることを決して気づかせないでくれ給え、同様にエールレケの悪い評判を知っていることも。彼はこの様なことを僕への圧迫手段として利用するか

らね。つまり彼は僕自身が彼から本を買い取ることを欲しているのだ（先週の手紙）。

① 聖ゴットハルト峠の北にある景勝の避暑地。

② 出版されなかったものという意味。

③ 綴がちよつと違っているけれど、原書三〇七頁に出ているエルレケと同一人物である。三三六頁をも参照のこと。なお、この人物の名は、八五年八月二一日妹宛の手紙ではエルリケとなっている。エルレケが正しい。

二五六、ニーチュエより

〔ズイルス＝マリーア、一八八六年八月五日〕

親友よ、一つのお報せと一つのお願いだ！——今ライプツィヒからフリッチが電報をよこした、「遂に入手！」と——僕を大喜びさせる言葉だ。僕がバーゼル時代にやった不運な過失（少しばかり「信用し過ぎること」、これは僕の生活においては実にしばしばなのだが）がこれで除去された。僕がこの春にドイツへ行つたことは何と良かったことか！出版者の可能性と公衆とに対する自分の立場を眼前 *ad oculos* 見せつけられたことに關しても、同じ言葉をも一度言わねばならない。僕が個人的にあの優秀なナウマン兄弟と交渉したことに關してもだ。遠くからでは決して得られなかった成果である新しい本が今や出来上った。バーゼルの君に一部送るようにとの指令を、もう数日前に出してある。さて次にお願いだ、古い友よ。それを、前から後へと読んで行ってくれ給え、そして怒ったり離れてしまったりしないでくれ給え——「全力を集中してくれ給え」、君の僕への好意の、君の百回も証明されてきた我慢強い好意

の全力を、——君にこの本が堪えられないとしても、それでも多くの個々の点はそうでないかも知れない／また若しかすると、この本は僕のツアラトウストラを若干はつきりさせるのに役立つかも知れない。ツアラトウストラは、僕が誰とも共有していない体験ばかりから生まれているので、理解し難い本だからね。孤独についての僕の感情を君に理解させることが出来たらなあ／生者の中にも死者の中にも僕は同類と感ずる人を持っていない。このことは表現出来なほど恐ろしい。そして自分がまだこの感情のために破壊してしまっていないわけを僕が納得出来るのは、この感情に堪える練習をしてきたことと幼い頃からこの感情が徐々に育ってきたということによつてのみだ。——ところで、僕がそのために生きている使命がはつきりと僕の前にある——この使命は言い様なく悲しい一つの事実 *factum* であるけれど、或る人間の使命に偉大さが内在していたことが今までにあるとするならばこの中にも偉大さがあるのだという意識によつて輝かされている。——

——ここには九月初めまで留まる。

誠実をもって、君の F・N

ズイルス＝マリリア、一八八六年八月五日

二五七、オーヴェルベックより

(葉書、テリテ、^① 八六年八月二二日)

親友よ、僕がフラウと共に企てた山地への小旅行の丁度前の晩に君の驚くべき新刊書を受け取った。僕はそれを早速持ってきた。こ

の様な旅の時には特に、君が奮起して到達した「彼岸」の中へ身を移し入れる気になるからね。他方において、僕たちは余りにも動いてばかりいたので、この最近作では一層目立って洗練されている様に思われる君の微妙な思索過程を辿るのに必要な落着きが得られなかった。それで僕はやつと第一と第二の書を思いをこらして読んだところだ。今後はドイツへ持つて行くことになる、僕はバーゼルにちよつといてから次の水曜にドイツへ向うのだ。素晴らしいジュネーヴ湖への序でに僕たちはアルプス旅行もやったのだ、しかし君の貴重な贈り物を受け取った報せとこれに対する心からのお礼とをこれ以上引き延ばしておきたくない。君の、常に誠実な

F・オーヴェルベック

モントルー、二二／八 八六

^① ジュネーヴ湖東岸、モントルーの南隣の町。

二五八、ニーチェより

ルータ・リグーレ、^① 一八八六年一〇月一二日

親友よ、昨日君の手紙(金の入った)が着いた、それによつて君のバーゼルでの住居の悩みを知った。何たる煩勞だ／偶然の何たるいたずらだ／君と奥さんに心からお気の毒だと言いたい。——

美しい清々しい秋だ、僕に色々の緊張をもたらしたはしたがそれ以上には解決と収獲をもたらした一年の後にだ。後者は即ち、僕の以前の書の中の二冊が新しい版で出ることだ。「悲劇の誕生」には序文として前に置かれた「自己批判の試み」が加えられており、これに

は君の注目を喚起したい。同時に人間的余りに人間的なものの二巻本にはそれぞれ長い序文が付けられ、それ等の中では、僕を「理解」するために本気で準備しようとする人々のために若干の指針が与えられている。序でながら、「理解されること」は少々困難だ、そして僕は、そうなるまでにはまだ可成りの時間が掛かるだろうと期待し且つ希望している。一番良いと思われるのは、僕の死後になってからそうなることだ。僕を本当に安心させたのは、君の様に繊細で好意的な読者でさえ、僕が本来何を欲しているのかという点については依然迷っていることだ。僕の心配は、まさに逆の方向において大きくなっていたのだ、つまり僕が今回は少々はつきりし過ぎていて「僕を」余りにも早く現わしてしまったのではないかとね。僕が先ずもって多くの教育的予備条件を授けなければならぬことは明らかなのだ、それからやがて僕は僕自身の読者たちを訓育し終えるに到るのだ、即ち破滅することなしに僕の諸問題を見ることを許される読者たちを。ブント紙上のウィートマン博士の一論文（九月一六日と一七日のだ、読み給え！）は、あらゆる種類の警察の眼が僕に尚早に向けられるのではないかと懸念を抱かせた。同論文の表題は「ニーチエの危険な書」というので、冒頭の文はざっと次の如くだった、「ゴットハルト鉄道建設の時に用いられたあのダイナマイトの荷は、死の危険を示す黒い警告旗をつけていた。」——

僕の宛先は今後は再び、ニース（フランス）局留だ。——僕の「気分」については心配無用だ、僕の最近著の攻撃的軍隊的气氛は良い徴候なのだと思ふのだが？

345

近頃来たJ・ブルクハルトの手紙は僕を憂鬱にした、僕に対するこの上ない讃辞に満ちていたにも拘らずだ、何しろ今の僕にとって讃辞なんか何であろう／僕が聞きたいのは、「これこそ私の悩みだ！これは私を沈黙せしめた！」という言葉なのだ——わが古い友オーヴェルベックよ、この意味においてのみ僕は僕の「孤独」に悩んでいるのだ。人間には僕は何処でも不足していない、けれど僕の懸念を、僕の懸念を共有している人間に不足しているのだ！——しかしこれは陳腐な話だ、そして僕はそれにも拘らず堪えて行けることを見事に実証した。——

ズイルス（ここは教授連の寄合所の様なものになって行く——）で僕は君の同業者ブリーガーと交わったが、君によろしくとのことだった。彼は、ライプツィヒの人たちの選択は失敗だったのでありハルナックを選ぶべきだったのだと真面目にそして媚態なしに言っていた。——マウレンブレヒャーがハインツェからの挨拶を伝えてくれた。プフルーク＝ハルトウングも向うから名乗ってきた。僕のオランダ人もいた、その他その他。

346

誠実をもつて君の

ニーチエ

① ラバロもしくはサンタ・マルゲリータから西方の半島の山地へ登って行って小さなトンネルを越えたところにある小部落（徒歩一時間半位）。

② ジャヴァの人である。八六年九月二日の妹夫妻宛のニーチエ書簡参照。

二五九、ニーチェより

〔八六年一〇月二九日受領〕

ニース(フランス)、サン・エティエンヌ小路、ジュネーヴ館
親友よ、ニースに約一週間前に到着、今まで健康は甚だ悪く、そして色々な我慢の試験ともいふべきいやな事どもにぶつかってきた。僕は世話をしてくれる人が一人もなく——しかも今は殆ど盲目だ！それにも拘らず、どうしてももう暫くは何とかやって行かねばならない！……僕の今日のお願いは、まだ貰っていない五〇〇フランを送ってくれないで、君が良いと思う方法で投資してくれる様にとのお願いだ、僕は今まで送って貰った分で十二月末までやって行く努力をしようと思う。僕のもう一つのお願ひ、「メッスィーナの牧歌」を一部持つていないだろうか？即刻必要なのだ（「放浪公子の歌」という小さな抒情詩集を作るために）けれど持つていないのだ。シュマイツナーに頼むわけには行かない。

パラグアイにいる僕の家族が彼等の植民事業の計画図を送つてよこして、そのためにナウムブルクにある僕の金を望んでいる。君は³⁴⁷一体僕のバーゼルでの見込をどう考えているだろうか？僕は、僕の時っている僅かな金をあらゆる場合に備えて用意しておかねばならない様な気がしている、つまり僕は、それを何時でも出せる様にしておかねばなるまいと思つてゐるのだが。——ところで僕は、この様な愚かしい金銭問題にも否を言う才覚がつかない。

アンリ・テーヌ^①から素晴らしい手紙がきた、彼は僕を、僕がこれ以上望み得ないほど真面目に考えてくれている。彼は実に広い教養を

持つてゐる、彼が取り上げてゐる幾つかの箇所は彼が如何に良く理解しているかを証している。さらに僕は彼にとつて「非常ニ示唆的 *infiniment suggestif*」であり、ヨーロッパの諸民族と能力とについで僕の全体的評価に関しては、彼はすっかり魅せられて一文ごとにもう一度吟味すると約束してゐる。彼は行間を読む僕の三人の読者の一人だ。

ミュンヒエンの君のお義母さんに僕は最近も手紙を書いて、哀れなケーゼリッツを元気づけようと努力して下さる御好意に心からお礼を述べた。^②序でながら、誰も彼もがこの秋には僕がミュンヒエンに現われるものと期待してゐた、「熱烈に」とザイトリッツが書いてきてゐる。これ等のワグナー信奉者たち皆が僕との關係を如何に忠実に保つてゐるかは驚くべきだ。僕が思うには、ワグナーが信じた理想を僕が今日もなお以前と同様に信じてゐるのだということとを彼等は知つてゐるのだ——R・ワグナー自身が彼の理想を妨げるために置いた多くの人間的余りに人間的なものに僕がつまずいたことが何だというのだ？その他その他。失敬、古い友オーヴェルベックよ！

君の F・N

① イポリット・テーヌの誤り。アンリもイポリットも頭文字はHである。テーヌからの手紙にはH・テーヌと署名されていた。

② ガストは八月九日にバイロイトでバルズィファルを初めて聴き、その後は年末までミュンヒエンで暮らした様である。ガスト宛ニーチェ書簡集一九〇番の注及び一九一番から二〇〇番までを参照。なお本書二六七番をも。

二六〇、オーヴェルベックより

バーゼル、一八八六年一月二十九日

親友よ、非常に残念であり、どうしてこんなことになったのか分からないのだが、お望みの「牧歌」を君に送ることが出来ない。君の頼みを受けて僕が直ぐ思い出したのは、僕たちの最近の引越しの際に僕が僕の蔵書を再配置した時に、牧歌の載ったシュマイツナーの雑誌が僕の手を経なかったことだ、僕はこの雑誌を少なくとも一年分、そして問題の号をも所有しているのだが。早速僕は特別探索を行なったが、どんなに探しても無駄だった。若しかすると君に何時か僕の所有分を全部送ったか持たせてやったのではなからうかという様な気がするけれど、全く不確かだ。君がそれを認めていない以上、そんなことはないだろう、しかしそうだと僕は全くどう仕様もない。無論僕はそう簡単には諦めないから若し今後その号が見付ければ直ぐに送る。それを手に入れる可能性を君が他に持っていないのなら、僕自身がそれをシュマイツナーに問い合わせて見よう。

五〇〇フランの委託には大いに喜んで応ずる、そして四パーセントの中央銀行がゴットハルト鉄道の債券をそれで買ってあげようと思う。君が所有していて（一〇〇〇フラン）、七月一日以来君が好きな時に三ヶ月前に通告すれば返して貰えることになっているツューリヒ州立銀行債券を、適当な折に別の投資のために解約することの全権をも委ねてくれる様この際にお願ひしておきたい。直ぐにそうしなければならぬ理由はないしその四パーセントの利率は

348

現在の情勢からすれば矢張り尊重されて然るべきだ、しかし早くやっておく方が良いと思われる事情が生ずるかも知れないので君の承諾を得たいと思うのだ。ところでパラグアイからの要請については安全性と特別な場合が起こる可能性とを判定することが全く出来ない僕としては、それに応じない様にと極力勧告したい。君の立場をそんな風に面倒にすることはまだやめ給え、そしてさらに自分の財産の自由処理権を出来るだけ放棄せぬ様にし給え。ナウムブルクにある金は安全に投資されていることと思う。この状態について僕が君に言えることは君が既に知っていることでしかない、そして僕たちが報されていることが正しいとすれば、そして僕の保証人の話だから僕はそれが正しいと考えないわけには行かないのだが、僕は、絶対確実な説明を求めることには至極当然な躊躇を感じている。この夏にメーリアンの数百万が町のものになったのだから今のところは苦しいことはない。どれだけこれが続くかは、今行なわれている学校建築と運河工事そして三七万五千フラン予算超過して先週開院の運びとなった大きな精神病院を顧慮するならば、疑わしい。国費の一〇〇〇フランの解消可能性は兎に角考えに入れておかねばならない。無論、それ（国費）のための好意がウィートマンの駄弁 *Preambulium* の意を体して最近減少したなどということには、僕はまだ全然気づいていない。五〇〇〇フランのことで君に兎に角手紙を書き、そして最近僕の祝辞なしに過ぎ去った君の誕生日以来僕の心にかかっている荷物をも下ろしたいと僕は近頃思い続けていた。僕の言い訳としては、この数週間間の苦難を考えてくれ給え！君の誕生日

349

の翌日になってやっと僕たちの引越しが可能になったのだ、まだ必要な作業が色々残っていたためだ、そして僕はここの職人たちの信用出来ない性質のために、本来必要であるより遙かに多くこれ等のことに悩まされたのだ。今は勿論住居は従来のもとは比較にならないほど快適で、特に僕の書齋は実に広く、そして驚くほど静かなところにあり、また幾つもの庭を見晴らす位置にあって非常に気持ちが良い。——君がテーヌについて報じている事柄は君の手紙の冒頭をうまく慰めてくれる。南フランスからの情報によればニースも陰鬱な、君には堪え難い日々ではなからうかと恐れる。僕と共にフラウも君の調子が早く軽くなる様に願っている、いつも君に誠実な

F・O

二六一、ニーチェより

ニース（フランス）ジュネーヴ館

一八八六年一月一四日

親友よ、新しい年齢を迎えた君が健康で、新しい住居に満足であつてくれる様に。その他の凡ての点では新しい年の一切が今までのままであるものと考えて貰うよ、何しろ今までは良かったのだから。何よりも先ず、君自身が良かったのだ、わが親友よ、君に対しては僕は、君の今までの、幾重にも試練にさらされてきた保証つきの信頼と好意を新しい年にも僕に与えてくれる様にと前以て頼んでおく必要がない。君の今度の手紙のおかげで僕はすっかりした態度を若干増すことが出来た、つまり僕がその後にパラグアイの件で

351

否を言った（欄外に。金についての君の諸提案に完全に同意して）ことに關してだ（——否を言わざるを得ない事柄を持ち出さずにいってくれなかったことに対して僕はひそかに腹を立てた……）。その他には何事も起こらなかった、大規模な津波を除けばだ、そして僕が何回も病氣になり憂鬱になったことを除けばだ、後者は全く小規模だ、但し小規模というのはこの種のものの場合には最も悪質だ。さらに色々指令したり考案したりせねばならないことがあった、フリッチのところにおける僕の諸著の新版を刊行者にとって出来るだけ有利なものにするために。今や、古い諸著（「曙光」以前の）が新しい小綺麗な衣裳をまとい、僕によって強力な長大な序文を付けられて、發送準備完了しているか、もしくは既に發送済みだ。昨日、「曙光」と「悦ばしき知識」のための序文も印刷可能なまでに仕上がった。「悦ばしき知識」の末尾を成すものは、「放浪公子の歌」という表題を持つ付録であるだろう。——これらの五つの序文は僕が今までに書いた最良の散文であるかも知れない。残念なのは僕の自由になる著者用献本が全然ないことだ。——

僕の今の状態と生活形式が持つている矛盾は目下次の点にある、即ち急進的哲学者 *philosophus radicalis* としての僕に必要な一切のものを——つまり職業、妻、子、交際社会、祖国、信仰等々からの自由を、僕が同時に不足状態と感じていることだ、僕は幸いに生きて生き物であり単なる分析機械や客観化の器具ではないのだから。必要と不足とのこの対立が、中程度の健康さえも欠如しているお話しにならない状態のために極端にまで押し進められるのだということ

352

を僕は付け加えねばならない、——何故なら健康の時には僕が不足状態を辛いと感ずる度合が減ずるからだ。また僕は五つの条件を一緒に入手することが絶対に出来ない、これ等の条件を一緒にした上になら或る中ぐらいの我慢出来る条件が僕の不安定な健康のために作られるかも知れないのだが。しかし何れにしても、もし僕が健康の五条条件を作るために急進的哲学者の八つの自由を自分から奪うとすれば、それは最悪であろう。——これが僕のこみ入った事情の最も客観的な表現であるらしい……失敬！むしろ、これを笑い草にしてくれるといい！——

お二人の僕に対する好意を切に願いつつ、君の友

ニーチェ

① これについては「母と妹へのニーチェ書簡集」(一九〇九年刊)の四五九番(これは母宛のものを利用した偽造書簡と推定される)を参照のこと。

二六二、オーヴェルベックより

バーゼル、八六年二月一二日

親友よ、ずっと前から君の親切な祝辞にお礼を言いたかったのだ。

日課、これは今学期は絶え間がないのでまたもや大いに辛いけれど、

——中世の教会史を大修正した、今回は六四名の聴講者のためだ、

バーゼルも最近の神学者繁栄で得るところがなかったわけではないからだ、毎日なのだ、そしてさらに二時間の教会史演習、——この

日課そのものは僕がやりたいことをやるのをさして妨げはしなかったと思う、しかしそれが最近、僕が平生嫌っている雑事と結び付

く様になってきて実に悩ましいのだ。先月の昨日、僕は特に愛していた妹を失った。彼女は胸を患っていて、秋に再会した時にはもう殆ど見込がなく、余り苦しまずに早く死んでくれればいいという願いしか残っていなかったものであり、そしてこの願いは結局、期待以上に叶えられた様だ。既に二、三年前に父親を失っているまだ小さい遺児二人は今僕の父及び父と一緒に暮らしている僕の末妹のところにいる、そして僕はどんな状態かを自分で見るために今度のクリスマス休みに出掛ける。その際に不運な面倒が起こり兼ねないから、それを忘れないうちに早速ここで述べておく。つまり君への送金のことであって、君は恐らく今度こそはいつもより長く待てないだろう。何とか可能ならば僕が出発の前に自分で処理する、もしくはフラウが僕の出発の直後に僕に代ってそれをする。最悪の場合——つまり前以て金を入手出来なかった場合——には勿論、新年に入って直ぐの時まで待つてくれる様にお願いをせねばならない。僕は丁度一月一日にここへ戻る積りだ。この遅延が君にとって特に困るとかどうしても駄目だとかの場合は直ぐ報せてくれ給え、その時は別の策を講ずるとしよう。

ところでもう一つ心配事があるのであって、二人で暮らすと二倍のことにぶつかるのだということが分かる。ミュンヒェンの地質学者である僕の義弟アウグストが秋に矢張り肺に疾患があると分かった。そのことの徴候は可成り前からあったのだ、しかし実際の病氣は医者たちの言によれば決してまだ絶望的なほどには進んでいないとのこと。とに角、直ぐに講師の仕事を休まざるを得なくなり、転

地が良いということも分かった。転地は直ぐ徹底的に着手されて、義弟は先週の今日マルセイユでテネリツファ^②行きの船に乗り込んだ、もともとイタリアでこの冬を過ごそうと考えていた彼の母親と二人の姉妹も一緒だ。彼等は今日到着する筈だ、最後の便りはバルセロナからだった。今や僕たちの願いの凡ては、一行が回復した患者と共に出来るだけ早く戻ることに向けられている。しかしミュンヘンの医者は半年後にもう帰れる見込があるとは決して言おうとしなかった。このことがうまく行けば、皆が一つの素晴らしい思い出を増やし、地質学者は学問的にも豊かになるわけだ。旅行途上の一行と最近ツューリヒで会おうと試みたのだが、或る偶然のために失敗した。——ウィルヘルム・フィシャーの次男のエーベルハルト・フィシャーは目下第五学期目の神学生なのだが、神学生として或る非常に見事な学問的発見をして出版したところだ。即ち、ヨハネ黙示録、クリスト教的に改作されたユダヤ書。僕は今この書の批評『神学文献新聞一八八七年、二八欄に発表された』に取り掛かっている。フラウからよろしくとのことを伝えて今日のところはお終いにする、いつも変わらず誠実なF・O——この手紙を受け取る君がこの前報せてくれたよりも良い状態で、明るい気分であれば嬉しい。君のために買ったのはスイス中央銀行の一八七六年一四三三一二番の五〇〇フラン債券だ。

① Kg.G. は Kirchengeschichte (教会史) を省略する場合に間違ったのだと思うから、その様に訳した。一八九七年九月三〇日ハンス・フォン・シュエーブルト宛の手紙ではK.G. という省略記号を用いている。オーヴェルベック集 (バーゼル大学刊) 第一部一八八頁参照。

② マロッコ^②の西方にあるスペイン領の島。

二六三、ニーチェより

(ニース、一八八六年一月二十五日)

親友よ、君には今回は暗然たるクリスマスマスが与えられたのだね、僕は心から気の毒に思う。異常な降雪の情報がドイツからやってきた時にも、そこへの君の旅行を考えて心配になった。君が何処かで動きが取れなくなったりしなかったのなら幸いだ、こんなに沢山の列車が同時に雪のために動けなくなったことは今までになかったことだと思う。フランスでもだし、スイスでもだ。僕たちニースの者はそれ等の凡てとは逆の有難い面を享受している、つまり空の不斷の明るさを。それでも寒い、僕個人の場合は非常に寒くさえる。北側の部屋でストーヴなしだ、いつも指が青くなっている。僕の南国暮らしの七つの冬に僕は既に何と凍えてきたことか！ 実際は僕はここで暮らすほどの金持ではない。南部屋の料金は僕には余りにも高過ぎる、良い場所にある民宿も同様だ。月平均で摂氏一〇、一一、そして七度(後者は九月)のエンガディーンの夏をも合算するならば、この人生において生産され得る最も寒い生活であることが明らかにになる。その悪い結果として僕は春と秋によって、殆ど一年全体が嫌いになるほどに悩まされねばならない。つまり暖い季節に必然的に伴っている弛緩させ元氣をも神経をも無くさせる作用に悩まされるのだ。ナウムブルクでのこの春は僕にとつて全くの拷問だった。

親友よ、金は今回は非常に欲しい、僕は最近のホテル代をまだ支払っていない。——近頃の僕を大いに苦しめており殆ど何時も僕の

356

けたオーヴェルベックは一七日にニーチエを訪ねた（ベルヌリ書第一卷三〇三頁及びガスト宛ニーチエ書簡集一〇八番の注参照）。

心にあるもの、それはミュンヒェンの哀れなケーゼリッツの状態だ、彼は氣遣わしい。あの様な人間の抵抗力を、そしてまた、ねじが切れる点をも僕は大体知っている。三年來の屈辱、顔面殴打、仮借ない拒絶、これ等はパンを稼ぐ必要性和からみ合っている（彼は新聞記事を一行四ペニヒで書いている）そして他方、今日の如何なるものも比較にならない不滅の作品を作ったのだという意識、このことは或る危険を伴うのであって、それが僕には分かるのだ。内緒で言うが、今にも最悪の報せがくるかも知れないのだ。彼の名譽感情は実に敏感だから、彼を物質的に今援助することも出来ない、彼は一切を突っ返す。こんなことは、世界が始まった時からある出来事だ、だからと言って悲哀が減ずるわけではない。——

新年良かれと願いつつ感謝に満ちて

君の友 ニーチエ

ニース、一八八六年一月二二日。

〔欄外に〕僕のところに紛れ込んできた非常に好意的な善悪の彼岸評を同封する。このウェルティ博士は元スイス連邦大統領ウェルティの子息だとのことだ。——その他はウィートマン調のものばかりだ。——

（前号所載一五八番への訳者補足）この手紙はブファイファーによれば九月半ばのちよつと前のものである（「ニーチエ、レー、サロメ。三者の交わりの証拠文書」二二八頁参照）。これをドレスデンで受